
魔王と正義

黒崎ルイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と正義

【Nコード】

N64510

【作者名】

黒崎ルイト

【あらすじ】

ある日、家の地下にある書庫でうっかり魔王を召喚してしまった俺、くわいはま呉羽正義。まひこすると魔王は人間界で暮らすと言いだし、家に住まわせる事になってしまった。これからどうなる俺の平凡な生活！

8/1現在、全話書き直し中です。話の内容はあまり変わりませんが、少しずつ変えていきます。申し訳ございません。

第一話 魔王召喚

ある晴れた日。

そんな明るい外とは対照的な薄暗い地下の書庫に俺はいた。

親父から送られてきた段ボールを開け、中に入っていた大漁の本を箱から出す。

海外にいる親父が住んでいるアパートの本棚に収まりきらなくなるとうとう送ってくるのだ。

本は大体外国語で、英語が苦手な俺には何て書いてあるのかさっぱりわからない。しかし中には怪しげな絵が載っているものもある。親父は本を趣味で集めていると言っていたが、まさかオカルトが趣味なのか？今度帰ってきたら聞いてみよう。

書庫の本棚は天井から床まで高さがあり、壁から横に列をつくり、等間隔でズラツと並べられている。しかも書庫一杯に本棚があるため、通路は一人がやっと通れる位しかない。

そんな中で俺、呉羽正義くれはまよしは書庫の整理をしていた。もういつその事意味の分からない本を捨ててやりたいが、間違つて貴重な本を捨てたりしたら面倒だし。実は親父は怒ると怖いのだ。前に一度からかって怒らせた事があったが、その時は言葉では言い表せない程の恐怖を感じた。

本棚の空いているスペースに本を入れると埃が舞い上がった。マスクをつけるのを忘れていたため、もろに埃を吸いこんでしまった。

「ゲホツゲホツ・・・うへえ、最悪・・・」

慌ててマスクをし、換気扇もつけた。

書庫には滅多に出来ない為、長年掃われる事がなかった埃が積っている。

今年の大掃除は大変そうだ。何て事を考えながら再び手を動かす。すると送られてきた段ボールの底にあった本に目がいった。本の表紙も中のページも真っ黒で、文字だけが白い。

奇妙な違和感に本を閉じようとしたら栞が挿んである事に気づいた。読みかけなのか何かの目印なの分らないが、栞が挿んであるなんて珍しく、好奇心に負け、そのページを開いた。

今までこんな風に栞が挿んである事なんて無かった。だいたい読みかけの本をあのお父がこっちに送ってくる事はない。

その為、そのページに目を通したが、どうせ何が書いてあるのか分からないだろうと思っていた。

「『我が声を聞きし者、契約を結ばん』」

俺はそこでハツとした。気づいたら読んでいた。何で読めるんだ？知らない文字なのに読める。おかしい。

「『汝の力、我に貸し与えたまえ。その代わり汝の願いも聞こう』」

口が勝手に開き、意味不明な文字を読み上げて行く。いつの間にか俺は本から目が離せないでいた。

「『ここに契約を結ばん』」

俺が言い終わると突然本が光りだした。驚いて本を落としてしまい、眩しさのあまり思わず目をつぶった。

腕で光から目を庇い、光が消えるのを待った。すると本の光は徐々に消えていった。そして何事もなかったようにあたりは静まりかえ

った。

何故いきなり本が光りだしたのか判らなかつたが、とりあえずホッと息をついた。

しかし安心したのも束の間。俺はその場に思わず固まった。黒い本の向こう側に男が居るのだ。

「誰だお前は！」

俺に気付いた男が近寄ってきた。そのおかげで男の顔が確認できた。男はまるで天使が舞い降りたのではないかと思つくらい美形で、腰まである金髪と透き通るような白い肌。そして血のような赤い瞳から目が離せなくなった。

「余よを呼んだのはそなただな？」

よ……？よつて一人称か？つーか何様！？

「は？呼んだつて……？それよりお前誰だよ。いきなり現れて！不法侵入だぞ！」

「不法侵入？言っておくが余はそなたに呼ばれたのだぞ？」

「呼んでないし！」

「呼んだではないか、召喚呪文を使って」

「召喚呪文……？何意味が分からない事言つてんだよ！召喚とか魔術かよ！」

「そつだが」

男は否定せずに真顔でそう言った。そして床に落とした黒い本を手に取った

「この本で余を呼んだではないか」

まさか・・・さつき俺が無意識に読んだのが召喚呪文？

俺は頭から血が引いていくのが分かった。科学が発展している現代に限ってそんな事がある筈が。でもあの黒い本がいきなり光りだし、男も突然現れた。どうやったのかそれは説明できない。もう何が何だか分からないし！俺は頭を抱えた。

「・・・仮に俺が呼んだとしよう。じゃあ帰ってくれ」

「無理だ。だってそなたは余に力が欲しいといったではないか。今変更するのか？余の願いはどうなる？」

俺がそう頼むと男はキツパリと言った。

「じゃあお前の願いは何だよ！」

「余の願いは人間界で暮らすことだ」

「・・・は？」

こいつは今何て言った？人間界で暮らす？

「ちよつ！ちよつと待てよ！お前悪魔なんだろ？何で悪魔が人間界で過ごしたがるんだよ！」

「余はただの悪魔ではない。魔界の王。魔王ルシフェルだ。余は魔界の暮らしに飽きた。あそこは権力に縋る亡者共しかおらぬのでな」

魔王だって？魔王ってあの、よくRPGで勇者に倒される定番中の定番のボスの事か？

俺が何を考えていたのか分かったのか男はムツとした。

「何故魔王が悪だと思っただけ？そなた達人間達のせいで、余が悪者という風に思われてしまっているではないか」

「でも魔王つていえばさ、やっぱり」

「魔王が悪者でなくてはいけないのか？魔王が悪者だと決めつけたのはそなた達人間だろう？」

「まあ、そうだけど・・・」

「だから余はそれを覆したいのだ！余は魔王！だが良い子の味方！」
「は？」

いきなりテンションが上がった魔王に俺は思いつきり引いた。
良い子の味方だと？

というかこいつ・・・。

「まさか、それがお前の本当の願い・・・？」

魔王はニコリと満面の笑みを浮かべ、

「その通り！」と言った。

「ところでそなたの名は何という？」

「呉羽正義だけど・・・」

「クレハマサヨシ？変わった名だな」

お前に言われたくねーよ！と心の中でツッコミを入れた。

「ではマサヨシ。これからよろしく頼むぞ」

「は？何が？」

「だからこれからの生活。よろしく頼むと言っておるのだ」

「よろしく頼むって、まさかお前俺の家に住む気か！？」

「そうだとさつきから言っておるではないか」

「いや無理だし！」

「しかし願いを聞き入れないと余は帰れないぞ」

「そんな横暴な願いがあるか！」
「余は魔王だから何でも許せられるのだ」
「お前が魔王でも俺は許せない！」
「まあまあ。そう堅い事を言うのではない。光栄に思え」
「思うか　っ！！！」

家に俺の悲痛な叫びが響き渡った。

第一話 魔王召喚（後書き）

自分の文章力の無さに泣けてきます。
面白いと思って頂けたら嬉しいです。これから頑張ります。

第二話 魔王、居候に

「で？」

「いきなり何だ？」

「本当に家に住むわけ？」

あれから魔王は書庫にあった本に興味を持ったのか、優雅に本を呼んでいる。時折、感嘆の声を上げたり、突然笑いだしたりするので、気になってどうしようもない。

送られてきた本を全て本棚にしまい、魔王に本当に住む気が訊いてみた。

「フツ・・・そうであったな。余がここに住むためには、そなたに力を与えねばならないのだったな」

魔王は本棚に本を戻し、何処からか短剣を出した。短剣の刃の部分が真っ黒で、奇妙に感じた。

「魔術を使えるようになるにはちゃんとした方法があるが、この方が手っ取り早い」

そう言うと魔王は行き成り、短剣で自分の左の手の平を切った。赤い血が滴り落ち、床に赤い点々をつくっていく。

突然のその行為に俺は止める事が出来ず、啞然とする事しか出来なかった。

「さあ、飲め」

「は？」

魔王は切った手を俺に向け、血を飲むように言ってきた。

「の、飲めって・・・絶対嫌だし」

「余の血を飲めば簡単に力が手に入るぞ」

「大丈夫なわけ？血を飲んで死んだりしないよな？」

「心配ない。余の血はその者の血に馴染むようになっておる」

「本当かよ・・・」

信用出来ず、今回は断る事にした。すると魔王は驚いた顔をした。

「いいのか？」

「別に力が欲しくてお前を呼んだ訳じゃない。というかこれは事故だ」

「事故？」

「俺は別にお前を呼びたくて呼んだわけじゃない。その本を見てそこに書かれた文章を読んだらお前が来たんだ」

「・・・」

魔王は短剣で切った方の手の上にもう片方の手をかざした。するとかざした方の手が淡く光り、傷が消え、血も消えた。きつと回復の魔法でも使ったんだろう。

そして今度は何処からか黒い本を出し、真剣な面持ちで俺に黒い本を差し出した。

「そうだな・・・これが読めたのだったな」

「読めたって言うか、気付いたらいつの間にか読んでいたんだよ。ていうか読めなきゃお前を召喚してないだろ」

「・・・そうだな」

魔王は考えるそぶりを見せた。その後、黒い本に右手をかざし、撫でるような仕草をした。すると本の表紙は見る見る内に黒から白へと色が変わっていった。

魔王は本を開き俺に見せた。中のページも白くなり、文字が黒くなっている。

一体何をしたんだ？という顔をしたら魔王は説明をさせた。

「これは魔道書だ。かつて人間が悪魔と契約し、作ったという禁書。今簡単な封印を施した。しかし、魔界で嚴重に封印されている筈のこれが何故人間界にある？」

「知るかよ。それは親父が送ってきたんだ。親父に訊いてくれ」

「そなたの父親か。どこにいるのだ？」

「アメリカ」

「ふむ。確か人間界の大国であったな。ちなみに此処は何処なのだろうか？」

「え、今更・・・？日本だ」

「確か小さい島国であったな。祭りが大好きだという」

祭りが大好きという所は納得した。俺だって祭り大好きだし。

「まあ、それはいいとして。本当に住む気か？」

「そうだと言っておるだろう」

俺は溜め息を吐いた。母さんにどう説明したらいいのだろうか。いきなり、「ごめん。魔王を召喚しちゃったよ」なんて言ったら卒倒し兼ねない。

するとその時、俺を呼ぶ母さんの声が聞こえてきた。階段を降りてきている足音も聞こえる。

まずいと思い、魔王に隠れるように言ったが、この部屋は本棚しか

なく隠れる場所なんてない。とりあえず書庫の入り口から見えない一番奥の棚の陰に隠れるよう指示した。魔王は怪訝な顔をしたが素直に従ってくれた。そして、丁度魔王が隠れた時に書庫の扉が開く音が聞こえたので、慌てて本棚の陰から顔を出す。

「正義？もう終わった？」

「お、終わった」

母さんは、ニツコリと微笑み、「そう、お疲れ様」と言った。

「正人さんたらまた本を買ったのね」

「増える一方だよ。今度帰ってきたら少し処分して貰おうぜ。そういえば、親父はいつ帰ってくるんだ？」

「確か今は忙しいって言うていたから夏位じゃないかしら」

それまであの本の謎は解けないってわけか。それを聞いて俺は肩を落とした。

「後3カ月と言う訳だな？」

「そう、後3カ月・・・って、うわっ！」

いつの間にか魔王が俺の背後にいて、会話に加わっていた。

その場に気まずい雰囲気流れる。

母さんは突然現れた見知らぬ人物に驚いていた。だけど、心なしか少し顔が赤い気がする。

怒ってるからか？それともこいつが美形だからか！？

「正義・・・？この人は誰なの？」

「あ、あの・・・こ、こいつは・・・その」

バレてしまった。いや、いずれは話さなければいけないのだが、心の準備が出来ていない。その為、母さんの質問には直ぐに答える事が出来なかった。

「余は魔王だ。訳あってここにいるマサヨシと契約を結ぶ事になったのだ」

魔王は誇らしげに言った。

勝手に自己紹介を始めた魔王に軽く殺意が湧いた。勝手な事すんなよ！余計説明が面倒になるじゃないか！

「魔王つて・・・正義貴方・・・」

母さんは信じられないという表情で、魔王を見てから俺を見た。というかこんな怪しい奴の言う事を信じないでほしい。俺は母さんの顔を見る事が出来ずに俯くと、母さんがクスツと笑った。ん？笑った？

「流石お父さんの子ね！」

「は？」

母さんはニコニコと満面の笑みを浮かべていた。

そして俺の阿呆顔に魔王が呆れているのが分かった。ムカついたので、思いつきり肘でわき腹を小突いておいた。

「実はお父さんも魔術師でね！若い時に魔族というのを目の前で召喚して見せてくれた事があったの。あの時の正人さんは格好良かったわ」

母さんの口から次々と暴露されていく親父の秘密。それを俺は呆然と聞いていた。

俺は今まで親父が魔術師だという事を全く知らなかったし、書庫にある本だつて親父が趣味で集めているという認識しかなかった。

親父は俺が小さいころから海外に出張や単身赴任で滅多に家になかったため、俺は親父の事を全くと言っていいほど知らない。

だから親父の秘密を知る事が出来たので、少しだけ嬉しかった。

「魔王様。名前はなんていうんですか？あ、私は加奈子つていいます」

「余はルシフェルという」

「まあ！素敵な名前ね！」

どこか！？

母さんの相変わらずの天然さに、思わず心の中で突っ込んだ。

「カナコ殿。実は余はマサヨシと互いの願いを叶えるため契約したのだ。マサヨシの願いは力で、余の願いは人間界に住む事なのだが、生憎住む所が無くてな・・・」

「え？誰も力が欲しいなんて言つてな「余がお願いしているのだが、マサヨシが許してくれなくてな」・・・無視ですか・・・」

「そうなんですか？じゃあ家に住むといいわ。ねえ、正義」

「何言つてんだよ母さん！こいつは魔王なんだぞ？またそんな簡単に信用して・・・！」

「でも、正義も迷惑かけているんでしょ？正義だつてルシフェル君と契約したんだから、ちゃんと願いをかなえなきゃ」

「まだ契約してないんだけど・・・」

「じゃあルシフェル君。狭い家だけど自分の家だと思つてくつろいでね」

「おお、宜しく頼むぞ母殿」

俺の意見は無視され、勝手に話が進められていく。
ああ、悲しいなあ、と一人悲しみに暮れていると、魔王が握手を求めようと手を出してきた。俺はその手をじっと見た。

「なんだよこの手は」

「マサヨシもよろしく頼むぞ」

ニコニコと笑う魔王を見て俺は溜め息を吐いた。

そして俺は疑問に思っていた事を聞いてみる事にした。それから決めても遅くない。

「お前はいつか魔界に帰るんだよな」

「余も一応魔王だ。いつまでも魔界に王が不在だと流石にまずい。だからいつかは帰るだろう」

俺はその答えに納得し、じゃあいいか、とルシフェルの手を取り握手した。

「わかった。じゃあ、よろしくな、ルシフェル」

こうして魔王と奇妙な生活が始まった。

第二話 魔王、居候に（後書き）

少し文を加えましたが、物語には支障がありませんので、読まなくても大丈夫だと思います。

第三話 魔王、学校へ その1

朝は六時半に起床する。

俺は朝が苦手な為、起きてからしばらく布団の上でぼーっとするからだ。

それでもって頭が覚醒したら制服に着替え一階に降りる。それから朝食をとり、学校に向かう。

いつもと変わらない生活。いつもと変わらない日常。

そこに、

「マサユキ。遅いではないか。いい若い者が朝から怠けるでない。それからおはよう」

魔王が加わった。

魔王を軽くスルーして洗面所で顔を洗う。魔王が文句を言っているようだがそれもスルー。

その時丁度廊下を母さんが通る。

「あ、正義おはよう」

「んー」

「お弁当はテーブルの上に置いてあるから」

「わかった」

リビングに向かい朝食を取る。魔王は既に食べたようで、今はコーヒーを飲みながら新聞を読んでいる。その姿は普通の父親がいる朝の光景を連想させた。そしてこれにツツコミを入れない訳にはいかないと感じ、すかさず魔王にツツコミを入れる。

「親父くさっ！」

「ん？なんか言ったか？」

ツッコミを入れてから俺は魔王の姿にやっと気付いた。魔王はチエツクのパジャマを着ている。そっか、服がないのかと一人納得する。

「・・・今日学校から帰ったら服買いに行くか」

「学校とは何だ？」

「勉強しに行く所だけど・・・」

「ほう。そういえば魔界にもそんなのがあったな」

魔界に学校？俺は不思議に思ったが、今は食べる事を優先した。まあ、いつでも聞けるしな。

「そうだ！余も学校に行こう！」

魔王の突然の発言に、俺は飲んでいたお茶を思わず吹きだす所だった。危うく気管に入る所だったぞ。

「い、いきなり何を言い出すんだ！」

「余も学校に行くと言ったのだ」

「ハッ・・・無理だ」

「何故だ！何故否定する！」

「お前が魔王だからだ！」

しばらく魔王と言い合っていると、騒ぎに気付いた母さんが仲裁に入る。

「朝から喧嘩なんてして、二人とも元気がいいわね」

「こいつが学校に行くなんて言うからだ」

「仕方ないではないか！行きたいのだから！」

魔王と睨み合い、今にも殴りかかりそうな俺達に母さんが再び止めに入る。

「ほら正義！もう学校に行く時間よ！」

「・・・わかった」

釈然としないまま俺は二階に鞆を取りに行く。

「ルシフェル君も！そんなに学校が気になるなら見てきたらどう？」

「でも、マサヨシが・・・」

「あの子はおあ見えても面倒見がいいの。貴方が無理やり着いて行ったら仕方なく嫌でも面倒見てくれるわよ」

加奈子はニッコリと笑った。

ルシフェルは苦笑して加奈子にお礼を言った。

そして「加奈子は天然に見えるが、実は確信犯だ」、とルシフェルは思った。

桜の花が散り、青葉の芽がちらほらと見え始めた桜並木。

あまり車の通りが少ないこの桜並木は、俺にとっていつもと変わらない日常の一部だった。

「いい所だな！」

隣にいる魔王がいなければ。

何でこいつはここにいるんだ。無理だって言ったのに！

「・・・来るなって言っただろ？」

「いいではないか。余は人間界を知りたいのだ」

「・・・」

意味深長に聞こえる台詞。

そして口は笑っているのに、目が寂しそうな魔王の横顔を見て、俺は何も言う事が出来なかった。溜め息を吐いて、心を切り替える。

「・・・とりあえず、服をどうにかしなきゃな」

「服？」

「それ親父のスーツなんだよ」

今の魔王の格好は黒いスーツに、緑と白の縞々のネクタイをつけていた。

親父は背が高く足が長い為、スタイルがいい魔王にはピッタリみただ。

きっと母さんが着せたのだろう。

「あと、その髪もどうにかしなきゃな。先生に見つかったら何て言われるか・・・」

「駄目なのか？」

「長さがなー。金髪はどうにもならないからな。染めることも出来るけど、お前は外国人で通せそうだし」

俺があれこれ考えていると、不思議そうな顔をした魔王が質問してきた。

「・・・のう、マサヨシ」

「ん？何だ？」

「さつきから聞いておると、余は学校に行ってもいいように聞こえるが……」

「……そうだと言ったら？」

「！すごい嬉しいぞ！」

子供みたいに喜んだ魔王に俺は呆気に取られた。何でそんな素直に喜べるんだ？ガキみたいな奴。

「なあ、お前魔法が使えるんだろ？」

「魔法じゃない。魔術だ」

「どっちでもいいよ。魔術でパパッと制服作れないわけ？」

「出来るが？」

「じゃあ、俺と同じ制服を作ってみるよ」

「よし」

魔王は目を閉じて念じ始めた。すると来ていたスーツが一瞬で制服に変わった。思わず感嘆の声を上げた。

「へー。便利だな」

「魔法や魔術と言うのはもともと暮らしを楽しむ為に出来たものだ。この位のことには造作ない」

「そうなのか？」

「最近では相手の命を奪う為に使われているがな」

命を奪う。その言葉に俺は納得した。

ゲームでだって魔法は自分の身を護り、仲間を護る為に使っている。他人の命を奪う為に出来た訳じゃなく、自分の生活を楽にする為に作られた魔法や魔術。

「どうしてそうなったんだろうな」

「・・・そうだな」

しまった！と言ってから後悔した。今の俺の台詞で気まずい雰囲気
が流れている。

これはいけないと、話を学校の事に戻す事にした。

「あ、後は髪型だな」

「そうだったな。これじゃ長すぎるんだったな」

魔王が人差し指で円を描くように回すと、一瞬で腰辺りまであつた
金髪が肩位になった。

「随分とサツパリしたな」

「うむ。余もなんかスッキリした」

「はは、心機一転ってやつか？」

そんな事を話している内に学校に着いてしまった。正門は殆どの生
徒が通る為、人目に付きやすい。もし、クラスの奴がいたら説明す
るのが面倒だし。そうだ裏門から行こう。

俺と魔王はこそこそと人目に付かないよう裏門へ回った。

「のうマサヨシ。この後どうするのだ？」

「俺に考えがある」

まあ、なんとかなるだろ。頭の中でこの後の作戦をもう一度おさら
いしておく。

そして作戦を魔王に伝える。魔王は最初こそ渋っていたが、最終的
には了承した。

「んじゃあ、校長室に行くぞ」

「ごうちょうしつ?」

「学校の一番偉い人・・・?かな」

「うむ、分かった」

見つからないように裏門の方にある職員玄関から学校に入ったが、上履きが無い事に気付いた俺は男子トイレに魔王を待たせた。その内の上履きを取りに行き、直ぐに魔王の所に戻り、魔王に魔術で上履きを作らせる。やっぱり便利だな。

それから先生達に見つからないように校長室に向かった。二、三回ノックをして中の返事を待つ。直ぐに中から入室の許可があり、意を決して中に入った。

校長室はお世辞にも広いと言う訳ではなく、八畳ぐらいの広さで、窓の前には木の机が置かれ校長は椅子に座り、何かを書いていた。机の前には来客と話す用のテーブルと椅子が置いてあり、壁にはガラス戸の本棚が置かれていた。

校長は白髪交じりで少し痩せているが、優しい人で結構生徒にも人氣がある。

「失礼します」

「おや、君は?」

「二年一組の呉羽正義です。校長先生にお話があるのですが・・・」
「ん?何だい?」

俺は魔王を見て目で合図を送る。作戦実行!

魔王が頷き、校長の前に立った。そして校長の目を覗きこむように見据える。校長は金縛りに遭ったように動かなくなり、目の光が失われていく。

「余の名はルシフェル」クライアンス。呉羽正義の従弟であり、本

日付けでこの学校に転校してきた」

「そう・・・君はルシフェル「クライアンス君。今日・・・転校して・・・きた」

校長が魔王の台詞を復唱する。

ツッコミを入れたい部分があったが今は我慢した。

魔王は校長が言い終わるとパチンと指を鳴らした。すると校長は夢から覚めたようにハツとして、室内をキョロキョロ見回した。不安そうな顔をしている校長に俺は声を掛けた。

「私は一体何を・・・？」

「校長先生。ルシフェルを連れてきましたよ」

俺は魔王を校長に紹介する。校長は暫らく考えてから、思い出したように魔王の名を呼んだ。

「おお！ルシフェル君か！すまない。どうやら歳の所為で君が来るのを忘れていたようだ。本当にすまない」

校長は申し訳無さそうに魔王の両手を取り、握手をした。魔王も笑顔で答える。俺と魔王は互いに目を合わせ、ニヤリと笑った。作戦成功だな。

「では、ええと、呉羽君。担任の先生を呼んで来てくれないか？」

「・・・わかりました」

俺は魔王に変な事をするなよと目で訴え、二人を残して職員室に向かった。

職員室は殆どの先生がいた。もうすぐホームルームが始まるので皆慌ただしい。

俺は職員室の奥、窓側にいる担任の諏訪先生に声をかけ、魔王の事を話した。

「・・・え？転校生？いたっけ？」

諏訪先生は今年新しく入ってきた新任の先生で、まだ学校の事に慣れていない。魔王の事もまあ、どうにかなるだろうと、そんなに心配はしていない。

「俺の従弟・・・です」

「呉羽の？おかしいな。そんな事聞いてないから・・・」

「もしかしたら言い忘れていたんじゃないですか？」

俺の発言に先生は慌てだし、周りを気にして小声で話し出した。

「こ、こら呉羽。大きな声でそんな事言うんじゃない」

じゃあ小声ならいいのか？と心の中でツツコミを入れた。

俺と諏訪先生は一緒に校長室に向かった。

校長室に入るとのほほんと二人がお茶を飲んでいた。ちゃっかりお茶菓子も用意してある。俺は諏訪先生と呆れてその光景を見ていた。

「お前・・・」

「おお、マサヨシ。遅いではないか」

「校長先生。転校生がいるって、初めて聞きましたが・・・」

「いや、実は忘れておって・・・あはははは・・・」

校長は笑って許してもらおうとしているようだ。諏訪先生は泣きそうなお顔で俺たちに救いを求めた。

「すまない先生、それには応えられない。というかすみません。魔王

のせいでご迷惑をかけて本当にすみません。
そこで時計に目をやると、あと五分でホームルームが始まるという
時間になっていた。

「先生、俺教室に行きますけど・・・」

「ああ、わかった。後から行くから・・・」

先生と魔王を残して教室に向かう。

廊下を慌ただしく他の生徒が走り、俺を追い抜いて行く。そんなに
急いだらコケるぞ、って、ほらコケた。目の前で躓いた男子生徒に
気付かれないようにこっそりと笑う。

ふと、校長室に残してきた魔王が気になった。

へマをしないだろうか。馬鹿な事をしないだろうか。

でも、アイツもガキじゃないんだし、なんとかするだろ。それにい
ざとなったら魔術があるしな。

俺は自分にそう言い聞かせて教室に急いだ。

第三話 魔王、学校へ その1（後書き）

うわー酷い文章です。

第四話 魔王、学校へ その2

ホームルームが始まる前と言うのは、どの学校どのクラスも賑やかなものだ。しかし今日のうちのクラスはいつもと違った。皆それぞれ固まってコソコソと話しているのだ。俺が教室に入っても誰ひとり気付かず、話すのに夢中だ。

何かあったのか？などと思ったが、聞くのが面倒なので放っておいた。朝から疲れたし。

すると前のドアからムードメーカー的存在の島崎が慌てた様子で入ってきた。

「皆注目！やっぱり転校生が来るらしい！」

俺は島崎の言葉に固まった。え、何で知ってるんだ？というか魔王の事じゃないよな。ないよな？ないよな？俺は内心の動揺を隠せず、そんな俺に気付いた常盤が声を掛けてきた。

「おい、呉羽」

「うはいつ！？」

何か変な返事してしまった。滅茶苦茶恥ずかしいんだが。常盤もすごい引いてるし。

「何だよお前。今変な動きしてたぞ」

「そ、そうか？気の所為だろ。それより転校生って？」

「ん？ああ、島崎が朝な、校長室の前を通ったら、校長と諏訪先生が話しているのを聞いたらしいぜ」

「いつだった？」

「だから朝だよ」

常盤はそう言ってまた皆の輪加わった。

朝？朝とはいつの朝だよ。何時何分何曜日って曜日は関係ない。

俺は今さっきこの教室に来たんだぞ？まさか俺が校長室にいたと島崎は知っているのか？いや、でも島崎は俺に気付いても何も言わない。俺が校長室を去った後に通りかかったのか？しかしここにくるまで二分ともかからない。つまり島崎はその間に校長室の前を通りかかり、目撃したという訳か。俺は出来るかどうか考えた。

・・・うん。島崎なら出来そうだな。

島崎は野球部のレギュラーで、盗塁するのが上手い為『俊足の島崎』や『盗塁王・島崎』と呼ばれているらしい。だから島崎なら出来そうだな。

一人で納得していると鐘がなり、各自それぞれ自分の席に戻っていく。それから暫らくし、諏訪先生がやってきて出席をとる。諏訪先生が出席を取っている間、皆そわそわと落ち着きがなく、先生に何度も注意を受けていた。

どことなく先生の顔がやつれている気がするんだが、気のせいだろうか。気のせいと言う事にしておこう。

出席を取り終わり、諏訪先生は畏まってこう言った。

「皆に転校生を紹介する」

待ってました！と島崎が大声で言った。教室に笑いがどつと沸き起こる。諏訪先生は何故島崎が知っているのか不思議なようだな。

「あー、実は転校生は海外から日本に引っ越してきた外国人だ。まあ、一応日本語は喋れる。時々おかしな所があるがな」

確かにあの喋り方はおかしい。どうして俺は今までそこに気付かなかったんだ？あの喋り方はまるでどこかの王様・・・ああ、そうだな。

あいつ魔王だった。

諏訪先生が教室の外にいるであろう魔王に声を掛けた。皆が期待に満ちた目で転校生を待ち望む。そして魔王が教室に入った瞬間、女子が悲鳴を上げ、男子は落胆する。

「始めまして、ルシフェルⅡクライアンスと申す。よろしく頼む」

申すって・・・お前は武士か？いや、余と言わなかったただけマシか。俺は魔王の自己紹介にハラハラしていた。へましませんように。

「ルシフェル君は呉羽の従兄弟だそうだ」

諏訪先生がそう言った瞬間、クラス中の視線が一斉にこちらに向けられた。俺は誰とも視線を合わせない様にそっぽを向いた。ちよっ！視線が痛い！「何で黙ってた？」という視線が痛い！やめてくれ！

「じゃあルシフェル君の席は、そうだな呉羽の隣が空いているからそこに座ってくれ」

俺は右隣りを見た。確かに俺の隣は空席で、何故ここの席が空席なのかずっと気になっていた。噂ではこのクラスには二十八人目のクラスメイトがいるが、病弱な為学校に来れないので空席だと聞いた。本当かどうかわからないが。

そんな事を考えていたら視線を感じ、気付くと魔王が俺の横に立っていた。

「これからよろしく頼むぞ、マサヨシ」

「あ、ああ」

魔王は大人しく席に着いた。クラスの女子が魔王をチラチラと見て

いる。まあ、確かにこいつはかなりの美形だもんな。見惚れるのは仕方ない。

それからホームルームが終わり、十分間の休憩が訪れるとクラス中の人間が魔王を囲んだ。恒例の質問攻め・・・転校生に課せられる試験だな。俺はその光景を他人事のように見ていた。しかし他人事と言っていられなくなった。

「ルシフェル君は何処に住んでるの？」

「マサヨシの家だ」

「ルシフェル君は何処から来たの？」

「魔か「アメリカだ！」」

魔王が考えもしないで発言しようとしたので慌ててそれを遮る。魔王に「てめえ、今何て言おうとした？あゝあん？」と目で伝えた。伝わっているかどうか分からないが。そんな俺達を皆が怪訝そうに見てきた。

「つーかさ、呉羽は転校生が来る事知ってたんだな」

「水臭い奴だな」

「本当。教えてくれてもいいのに」

クラス中の非難の目が俺に！どう言い訳しようかと思考を巡らせた。

「お、俺だって今日初めて知ったんだよ。こいつが俺と同じ学校に行く事を」

我ながら何と見苦しい言い訳。でも、これは事実。真実ではないが事実であることは確かだ。これで騙されてくれる事を祈る！

「そうなのか？」

「え？でも同じ家に住んでるんでしょ？何で知らない訳？」

痛い所をつかれた。その言い訳は考えてなかった。こいつら意外と賢いぞ。

だ！っもう！面倒だ！こうなればヤケクソ！

「いや、こいつは昨日家に来たから。それに聞く暇無かったし」

「でも事前に教えるだろ、普通は」

「話す機会がなかったんだよ」

「え？仲悪いの？」

「そうじゃない」

今度は俺に質問が集中した。どうなっているんだ！何で俺！？ああ、でも下手なに魔王に喋らせてボロを出させないだけマシか。

皆の質問というか、尋問を何とか乗り切り頑張った。魔王が心配そうな顔で見えてきたが、今は構っている暇などない。

「ふーん。つまり、ルシフェル君は昨日家に来て直ぐに寝た為、話す事もなく、今日学校に来たと？」

ようやく尋問が終わり、皆が納得のいく答えを導き出した。頑張った俺。良くやった俺。誰か褒めてくれ。

「そっか、ルシフェル君も大変だね。何かあったら私たちに言っ
ね」

「そっだぞ。強力するからな」

そんな事を話している内に一時間目を告げる予鈴が鳴った。がやがやと皆自分の席に着く。

そこでやっと俺は安堵の溜め息をついた。疲れた。深い溜め息をついた俺を見て、魔王が話しかけてきた。

「のう、マサヨシ。これから何をやるのだ？」

「言っただろ？学校は勉強する所。つまりこれから勉強するんだ」

「ほほう。なるほど。これから何の勉強をするんだ？」

「社会だよ。歴史な」

「人間界の歴史か。面白そうだな」

そんなこんなで、魔王をフォローし、一日が過ぎて行った。

そして俺は魔王が実は頭がいい事と知った。何故か日本語も読めるし英語も喋れる。それに、二時間目に体育の授業があったんだが運動神経もいいみたいだ。

後で聞いたのだが、翻訳魔術と体力強化魔術を使っているらしい。そんなの反則だ！とアップラーを食らわせたが、それもやすやすと避けられてしまった。

それから、一日で転校生のルシフェルの存在はあっという間に学校中に広まった。下校する頃には何故か他の学年、他のクラスの奴から声を掛けられた。もちろん従兄弟である俺も捕まり、尋問に遭った。女子の尋問は特に酷く、教えなきゃ殺されると思った程だ。

そして俺と魔王は帰路についた。魔王はニコニコしながら俺の隣を歩いている。

「何がそんなに楽しいんだ？」

「ん？楽しいからだ」

「それは、よーございましたな。俺は朝からクタクタだよ」

お前の所為でというのは心に留めておいた。

「のう、マサヨシ」

「ん？」

「これからよろしく頼むぞ」

魔王は握手を求めてきた。

何故今改まって握手？と思ったが俺は魔王と握手した。

何で握手したって？けじめってヤツかな。

俺はこいつが帰るまで面倒をみる。そのけじめだ。

すると魔王はニッコリと笑ってこう言った。

「よろしく、セイギ」

・・・・・・・・・・・・・・・・何だつて？

俺はわなわなと身を震わせた。こいつは今何て言った？俺の聞き間違いないじゃなきゃ、セイギと言ったか？言ったよな？言っちゃったよな？？

「さつき教科書に載っておった。正義はセイギとも読めるんだな。

余はセイギの読み方が好きだから、これからはセイギと呼ぶぞ」

「セイギと呼ぶなああああ！」

そう叫びながら魔王に殴りかかる。こいつは俺の地雷を踏んだ。

俺はセイギという呼ばれ方が好きじゃない。自分でもよく分からなけれど、セイギと呼ばれるのは好きではない。というか呼ぶ事を絶対許さない。読んだ奴は秒殺だ！だから魔王も秒殺！

魔王は俺の右ストリートを軽々と避け、俺の名前を呼びながら走り出した。もちろん俺は魔王を追いかける。

「ハツハツハツハー！セイギ、セイギ、セイギ！」

「黙れこのクソ魔王！その口閉じねえと殺す！」

この追い駆けっこは家まで続いた。久しぶりに追い駆けっこなんかした。というか余計に疲れたんだが。でもまあ、おかげでぐっすりと眠れそうだ。

え？魔王？秒殺は出来なかったが、もちろん制裁を食らわせといたさ。

魔王は不平不満を言っていたが知るか。俺をセイギと呼ぶヤツが悪い。

それにしても今日は疲れた。もう寝よう。俺は疲労のあまり、倒れるようにベッドに入った。

布団に入ってから祈った。今後魔王が問題を起こさないようにと。

まあ、この願いは決して叶うことはないんだが。

俺がそれを知るのはずつと後だった。

第四話 魔王、学校へ その2（後書き）

はい、そうです。無理やり終わらせました。

文章をまとめる力を私に下さい。

何故正義がセイギと呼ばれるのを嫌がるのかは、また今度で。

第五話 正義はセイギ

桜の花が散り、若葉が映えた頃。人々は憂鬱な気分になり、無気力、不安感、焦り、等の症状が現れる。俗に言う五月病である。

新学期が始まってから一カ月経ち、学生の中にもそういう症状を訴える者は少なくない。しかしある学校だけは五月病の症状を訴える生徒がいなかった。

「ルシフェル君！調理実習でこれ作ったの！よかつたらこれ貰って！」

「ちよつと抜け駆け禁止よ！私のも貰って！」

「じゃあ、私のも！」

金髪の身目麗しい少年の周りに数人の女子生徒が彼を囲んでした。少年がこの学校に来てから一週間経ち、殆どの生徒が少年を知っていた。寧ろ知らない人間はいないであろう。

少年は天使の様な微笑みで、少女たちを魅了し虜にしていく。

「ルシフェル！これ教えてくれないか？」

「あ、俺も！今日当てられるんだよ」

男子生徒も少年の優しさや性格に惹かれて行く。

少年のお陰で五月病という症状が現れないのである。
只一人除いて。

「はあ……」

いつもより重い溜め息を吐いた。ルシフェルの所為で心労が絶えない。寧ろ積み重なる一方だ。

俺は机に突っ伏した。もちろん耳は魔王達の会話を拾っている。体が重くだるいし、やる気が無く憂鬱だ。ああ、これが五月病というのか。教室のざわめきがBGMになってきた頃、クラスメイトの翔太が話しかけてきた。

「最近元氣無いね」
「だるいんだよ」

翔太は中学の時に一緒のクラスになり意気投合した。親友と言っても良い位だ。いや、俺の中では親友という位置づけになっているんだけど。

「これも全部あいつの所為だ」
「あいつってルシフェル君？」

翔太にも本当の事を話していない。いつか話そうと思うのだが、中踏ん切りがつかないのだ。俺は女子に囲まれ、ワイワイと楽しそうに話しているルシフェルを見た。どんな時でも目が放せない。

「でも、ルシフェル君も大変だよな。今までアメリカに居たんだよね？それなのに親の都合で日本で暮らすなんてさ」

「・・・ああ」

俺はまた溜め息を吐いた。その様子を見て翔太がこう言った。

「正義もしかして五月病？」

そういう事にしといてくれ。

時間はあっという間に過ぎ昼休みになった。翔太と魔王と一緒に屋上に向かう。

昼は今まで翔太ともう一人、伊藤陽一と三人で一緒に食べていた。陽一も親友の一人で、性格は明るく、誰とでも仲良くなれる盛り上げ上手な奴だ。陽一は購買にパンを買いに行ったため先に三人で屋上に来たのだ。

屋上は余り人がいなくて俺たちにとって憩いの場であったが、魔王が来てから魔王見たさに屋上に人が来るようになった。その為俺達にも視線が向けられ、本人がいるにも関わらず、言いたい事を言うてくるので居心地が悪い。

今日も既に人がいた。殆どが女子で、魔王が姿を現すと皆こちらを見てくる。いつも通り屋上の隅に陣取り地べたに座った。母さんお手製のお弁当を広げ食べ始める。

「なあ、もう屋上で食うのやめないか？」

「うーん。そうしたいけど、何処か良い所ある？」

「実は良い場所見つけたんだ。西棟の非常階段」

こそつと小声で話した。

西棟は一階に家庭課室、二階に理科室、三階に図書室がる。図書室の近くには非常階段があり、そこは滅多に人が来ないと最近知った。

「あー、あったねそんな所」

「図書の司書さんからの情報だ」

「む、まさか脅して聞き出したんじゃないだろうな」

「するかアホ」

俺達の事を知った司書さんが教えてくれたんだと告げる。

大体俺と一緒に食べなくてもいいんだぞ？と魔王に言うと魔王はムツとした。

「余はまだ学校に慣れていないのだぞ。そんな余をセイギは放っておくのか」

魔王の「余」という一人称に翔太は何も反応を示さない。それもその筈。もう慣れてしまったからだ。最初は流石に皆驚いていたが、最近は誰も反応しなくなった。慣れって怖い。しかし別の意味で翔太は啞然としていた。

「正義……ルシフェル君が今セイギって言ったけど……」

「ん？ああ、やめろって言ったんだけど、全然やめようとしなから諦めた」

翔太は信じられないという顔をした。俺だって自分がセイギと呼ぶ事を許可したなんて信じられない。あんだだけ嫌だったのに。

「じゃあ、俺もセイギって呼んでいい？」

翔太がニコニコと微笑みながら訊いてきた。俺は呆然として咄嗟に返事が出来なかった。

まあ、翔太ならいいかと思った。

「別にいいけど……」

「え、ずる！俺も呼ぶし！」

大量のパンを抱えた陽一が、いつの間にか後ろに立っていた。俺はニヤリと笑う。

「えー、どうしよつかない」

「俺だけ除け者かよ！」

「じゃあそのパン一つくれ」

陽一は笑顔でパンを俺にくれた。これで夜食ゲットだぜ。すると陽一はパンを食べながら喋り出した。

「なあなあ、きょーひは？ひははっはらあほぼーへ」

「日本語でお願いします」

「食べながら喋るなよ」

「行儀悪いぞ」

俺達にそう言われ、陽一はパンをのみこんでから喋った。

「悪い悪い。今日暇？暇だったら遊ばないかって言ったんだよ」

俺と翔太は別に用事はないからいいけど、と返事をする。え？魔王？アイツに用事なんてものは無い。むしろ暇を持て余している位だ。

「んじゃあ、久しぶりにセイギの家で遊ぼうぜ」

「はあ？俺ん家？別にいいけど・・・」

頭の中で部屋の状態を思い出す。確か昨日片付けたから綺麗だった筈。

「よし、じゃあ、学校終わったらそのまま直行な」

え、直行ですか？とう俺の意見はスルーされ、昼休みは終わった。

そして放課後になり、四人で一緒に家に向かっている。途中でお菓

子を買ひ、どうするかと話しながら。

「で、何する？」

「四人で出来るゲームとかでいいんじゃない？」

「いいね。で、何のゲーム？」

しかし、結局歩きながらじゃ決める事が出来ず、とうとう家に着いてしまった。

そういえば母さんは出かけるって言ってたな。一応ドアノブを掴んで開いているか確認したが、やっぱり鍵が掛かっていたので鞆から鍵を出した。その後ろから陽一が「あれ？おばさんいないんだー。じゃあ、少し騒いでもいいよな」と言ってきた。まあ、少し位ならいいだろう。

ドアを開けると、俺より先に陽一が中に入って行った。その後には翔太も続く。もちろん翔太が礼儀正しいので「お先に」と言いながら。

「おっじゃましまーす」

「おじゃまします」

二人とも何度も遊びに来ているので、勝手知ったる他人の家という事で、二階が上がって行った。魔王もその後を追ひ、俺はキッチンで飲み物を調達してから二階上がった。

部屋に入ると三人はいつの間にかゲームを始めていた。何のゲームをしているかだつて？ご想像にお任せします。

「お前ら部屋の主が許可してないのに・・・」

「余が許可したぞ」

「細かい事は気にするなつて」

どこが細かいんだ？と陽一の頭を力よく掴んだ。勿論陽一は痛さに

悲鳴を上げ、ゲームの結果は負け。ハハ、ざまあ。

それからゲームをして盛り上がり、いつの間にか外は茜色に染まっていた。

「そうそう、セイギ何か悩みとかあるの？」

翔太がいきなり俺に訊いてきた。

「最近ため息ばかり吐いているから。昼にも言ったけど五月病かなって」

五月病・・・って？ああ、そういえば学校でそんな事言われたっけ。すると五月病という言葉に魔王が反応した。

「翔太、ごがつびょうとは何だ？」

「新入生や新入社員によく見られ、新しい環境に適応出来なくなる精神的な症状の事だよ」

「でもセイギは新入生ではないぞ？」

「確かに新入生じゃないけど、クラス替えとかあったから。一応環境は変わっているし。でも多分セイギの場合はストレスとかが原因じゃないかな？」

すると皆が俺を見てきた。ストレスな・・・心当たりは大いにある。でもそれは言えない。言ったら面倒な事になる。

「そうだな。きっと魔お・・・ルシフェルが家に来るから俺も緊張してたんだよ。だって外国人だぜ？最初は言葉が通じるかなーとか不安になるじゃん。それにどう接していいか分からなかったからさ、気を使っちゃって。だからきつとそのせいだ」

俺が笑顔で言うのと翔太と陽一は、そうだよな、と言って納得してくれた。思わず魔王と言いつつになっただが、二人には気にならなかったみたいだ。

「そんなに気にするなって。もう大丈夫だからさ」

「そうだね。ルシフェル君も優しいし、それに日本語ペラペラだし。気を使うことはないよ」

「よかったな！ルシフェルで！」

するとおだてられた魔王が調子に乗り、鼻を高くした。

「そうだぞセイギ。余でよかったな」

「うん、黙れ」

すかさずその鼻を折っておいた。調子に乗らせないからな。

「そういえば、何でセイギって呼ばれるの嫌がってたんだ？俺が初めて会った時、セイギって呼んだらすっごい怒ってただろ？」

陽一がなんとなく訊いてきた事は分かる。でもそれには答えられない。

俺にとって今までセイギと呼ばれるのはタブーだったのだ。何故かと聞かれても答えられない。俺にもセイギと呼ばれるのが嫌な理由が分からないからだ。

「・・・別に。嫌だっただけさ。俺の名前はまさよしなんだからそつちで呼ばれたかったし」

「ふーん。そっか。でもよく許したな」

許した訳じゃない。セイギと呼ばれるのにまだ抵抗があった、でも

何故か魔王に呼ばれてからは平気だった。よくわからないけど。

「何でだろうな。多分、踏ん切りがついたっていうか、どうでもよくなっただよきつと」

まあ、気にすんなよ、と言ってゲームを続行した。

それからまたゲームで盛り上がり、夕飯時になったので二人は帰って行った。

すると入れ替わるように母さんが返ってきた。

「ただいまー。町内会の集まりで遅くなっちゃった。出来合わせでごめんね」

「いいよ。一応お米は炊いておいたから」

「さすが正義！頼りになるわ」

自分でも何故「セイギ」と呼ばれるのを嫌なのか分からない。しかし分からない事も分からない。どうして今まで気にならなかったんだらうか。

昔の事を全く思い出せないのは、きっと俺の記憶力がないからだらう。

今はそう自分に言い聞かせるだけ。何故ならそんな事を考えている暇などないからだ。

「のうセイギ、またさっきのゲームの続きをしようではないか」

「またかよ。お前あれ好きだな」

夕飯を食べながら俺達がそう会話していると、箸を休め母さんが呆然としていた。

「ルシフェル君、今・・・セイギって呼んだわよね？」

魔王はそうだが、と頷いた。母さんは俺を見て少し動揺しているみたいだ。

「そ、そう。正義は何ともないのね？それならいいの」

母さんの様子を不思議に思ったが、深くは考えなかった。

そして、次の日学校に行くと、クラスの全員からいつの間にかセイギと呼ばれていた。

陽一が大声で俺をセイギと呼んだせいだ。あれから皆は俺の事をセイギと言いだした。

さすがに最初は戸惑ったけど、数日後にはすっかり慣れていた。それと、もちろん陽一はシメておいた。陽一だけな。

しかし、あれだけ嫌だったのに、何ともないとは不思議なものだと俺は大して受け止めていなかった。

あ、これって、成長したって事か？すごいじゃん俺。

そう思い込み、自分を褒めたのだった。

ちなみに俺が五月病だという事も広まっていた。

誤解を解くのに苦労したけど、これも広めたのが陽一だったので、勿論ストレス解消にもう一度シメておきました。

第五話 正義はセイギ（後書き）

やっと五話目です。

はたして母さんは何か知っているのか・・・怪しいです。

陽一とは高校一年の時に同じクラスになって仲良くなりました。
陽一はアホの子です。

第六話 四人の秘密（前書き）

すみません。最後の方を少し訂正と書き加えました。

第六話 四人の秘密

今日は土曜日。学生である俺はもちろん休みだ。母さんはお隣さんと出かけていて、夕方には帰ると言っていた。

今日は久しぶりにゆっくりするか。等と考えていると携帯が鳴った。翔太からだ。

「もしもし？」

『あ、セイギ？おはよー』

「はよー。どうしたんだ？」

『今日暇？遊びに行かない？』

今さつき、今日は家でゆっくりまったりしようと思ったんだけど、ま、いつか。

「いいけど」

『よっし、じゃあ決まり！あ、陽一もいるから』

「お前らはセツトなの？」

『細かい事は気にしない。じゃあ駅前に10時集合ね。あ、ルシフェル君も連れてきなよ』

翔太はそう言うと一方的に通話を切った。俺に拒否権は無い訳ね。仕方なく俺は魔王の部屋に行き、ドアをノックして返事も待たずに勝手に開けた。魔王はパジャマのままベッドの上で呆けていた。何てマヌケ顔なんだと思いつつ、魔王に声を掛ける。

「おーい、ルシフェル。起きてるか？翔太が遊ぼうって誘われたから行くぞ」

「・・・うむ・・・分かった」

魔王は返事をする指をパチンと鳴らし、一瞬で着替えた。

「お前朝苦手なのか？」

「うむ・・・」

「でも、いつも俺より早く起きてるだろ？」

「早く起きて今みたいにはーっとしてるからだ」

「お前も低血圧か」

魔王を急かしてリビングに行き、朝食をとり始めた。ちなみに我が家の朝食は平日が米で、休日はパンだ。

それから準備をし、戸締り火の元の確認をして駅に向かった。

最近はずっと暑くなる陽気が続き、夏が近いと感じ始めていた。だが今日は風が吹いているので暑くはならなさそうだ。

魔王と他愛のない会話をしているとあつという間に駅に着いた。駅前には人や車が行き交い、俺はこの喧騒から一刻も早く逃れたいと思った。

それに魔王の事もある。この容姿に行き交う人が皆魔王を見て顔を赤らめ、つい先程も逆ナンに遭った。勿論、魔王は丁重にお断りしていたけど。

そんな魔王への視線もあつてか、人酔いという特性を持つ俺は早くも挫折しそうになっていた。特性って、ポ モンかよ俺！と自分でツッコミを入れながら。

「・・・気持ち悪う」

「大丈夫か？」

「俺、人ごみとか駄目なんだよ・・・人酔いつてやつ」

「人酔い？聞いたことないが。気持ちが悪いなら余が魔術を掛けようか？」

魔王はそう言うのと俺の目を手で隠した。行き成り視界が遮られ俺は対応出来ずにいたが、気持ち悪くならないなら、と素直に受け入れた。そして直ぐに魔王の手が退き、気分がスッキリしている事に気付いた。

「どうだ？」

「おお、なんかいい感じ」

「酔い止めの魔術だ」

「薬より効き目が早くていいな。というかそんなのもあるのか」

「そうだろう？魔術を使いたくなっただか？」

確かに魔術が使えると便利だし、楽しそうだ。魔王の魔術を見て魔術を使ってみたいと思った。でも、あれから考えた。魔術を使えるようになったら魔術にばかり頼る駄目な人間になるような気がした。人として駄目な人間にならないという自信は、はっきり言ってない。注意してればそうならならいだろうけど。

「ただ、俺は・・・」

「やっぱりいいよ。俺には必要ない」

「何故だ？」

「別にこの世界では魔術が無くたって生きていけるしな」

「でも、あると便利だぞ？」

「あつたらあつたで、きっと俺は魔術に頼り切って駄目な人間になりそうだから」

俺が断ると魔王は黙りそれから勧めてこなくなった。

多分納得はしていないだろう。こいつは魔王だ。魔術を使う事が普通なのだから。

「そうか……。でも、もし魔術が使いたくなったら言うんだぞ。等価交換で契約が成立するのだが、これじゃ契約にならないではないか」

「そうさせてもらおうよ。使いたくなるかどうかは分からないけど。それに、別に目的があつてお前を召喚したわけじゃないって言っただろ？」

あれは不慮の事故だ。それは断言出来る。決して俺が望んで呼んだ訳じゃない。

それからあまりの遅さに俺がキレかけ魔王がなだめていると、ようやく翔太達がやって来た。10時は20分前にとっくに過ぎている。

「悪いー、遅くなった」

「……そつちが誘ってきた癖に遅れるとはいいい度胸じゃないか。しかし俺は優しいからな。理由は聞いてやろう。7文字以内で答えろ」

「陽一が寝坊した」

「だろうな」

「え？酷くない？なあ？ルシフェル！」

陽一は魔王に泣きついた。しかし魔王は笑顔で陽一の両頬を強く引っ張り始めた。どうやら魔王もご立腹のようだ。

「いひゃい……」

「お前が悪い。という事で、昼は陽一のおごりな」

「ひひょいつ（ひどい）！」

それから適当に街をブラブラ歩いて、昼飯は半分は陽一のおごりで食べた。俺もそこまで鬼じゃないからな。でも半分ぐらいならいい

だろう？

そしてその後カラオケ行ったり、ゲームセンターに行ったりして楽しんだ。

もちろんその都度、魔王が奇怪な行動を起こしたりしたのだが、そこは何とかカバーした。翔太達に変人だと思われていませんように、と願いながら。

そして今、ゲームセンターでシューティングゲームで遊んでいる。翔太と魔王でどちらが多く点数をとれるかで競い合っている所だ。するとどこからか怒鳴り声が聞こえてきた。罵り合っているような感じだ。

「向こうで喧嘩してるようだ」

陽一が偵察から帰ってきてきてそう言った。て、お前いつの間になくなっていったんだ？

すると翔太が「またか」と溜め息を吐いた。

「最近多いよね」

「そうなのか？」

「どっかのグループと島争いしてるっつー噂」

「へえ」

俺は大した事ではないと聞き流した。むしろ関わることなど無いだろうと思っていた。この時までには・・・

その後、魔王と俺が交代して翔太と対戦する。しかし夢中になりすぎて魔王の存在をすっかり忘れていた頃にそれは起こった。

「よー兄ちゃん達。ちょっといいか？こいつお前らのおトモダチだよなあ？」

金髪の男が魔王の首根っこを掴み俺達に差し出した。男は口に二つピアスをつけた、がたいのいい男だった。俺は魔王を見て心の中で、何したわけ？と叫んだ。翔太は男達に下手に出て相手に対応した。こういう輩は怒らせた面倒だからだ。

「そうですが。何かしましたか？」

「こいつが俺の女に手を出したんだよ」

「余が出した訳ではない。向こうから話しかけてきたのだ」

魔王は臆することなく男に反論した。男は額に青筋を浮かべ、今にも魔王に殴りかかるうという気迫だ。俺はお前は黙ってる！と魔王を睨みつけた。

「どう落とし前つけてくれるんだあ？」

男はギロリと俺達を見てきた。落とし前と言われてもなあ。どうする？と翔太と陽一に視線を送った。二人も面倒くさそうな顔をしている。俺だって面倒な事は嫌いだ。

どうしようかと考えている俺達の思いを知ってか知らずか、魔王が行き成り男の腕を掴み、華麗な一本背負いを披露した。不意打ちに男は受身を取れず、その衝撃でぐったりとして動かなくなった。多分気を失ったのだろう。

その場に気まずい雰囲気が出る。

しかし、男の連れの一人がハツとして、怒鳴り散らかしながら魔王に殴り掛かってきた。

魔王はそれを難なく避け、それを合図に男達が一斉に魔王に殴り掛かる。俺や翔太と陽一にも殴り掛かってきた。魔王はそれを目の端

で捉え左手を差し伸べた。

「邪魔だ」

俺が止める暇もなく魔王は左手を振り払う様な仕草を見せた。そして次の瞬間、俺達の周りに薄い光の壁が吹き、男達は壁に当たり弾き飛ばされた。壁は一瞬で消え、翔太と陽一は男達を見てから魔王を凝視した。再びその場に気まずい雰囲気の流れる。

すると騒ぎを聞きつけた店員が来るのが分かり、俺は魔王の腕を掴みゲームセンターから逃げだした。当然その後を翔太と陽一が追ってくる。

ゲームセンターから5分位の所にある公園のベンチに座り息を整えた。土曜日なのもあってか家族連れが多く見られる。

魔王も同じく俺の隣に倒れるように座った。そして暫らくしてから翔太と陽一がやって来た。

「・・・セイギ・・・さっきの・・・」

翔太が気まずそうに訊いてきた。

遂に話す時が来たか。と俺は腹を括って翔太と陽一に向き合った。

「ルシフェル。話すけど・・・いいよな？」

「余は別に構わないが？」

俺は深呼吸してから二人に話し始めた。ルシフェルが魔王である事。そして俺が魔王を召喚した事。魔王の願いを聞き入れ、一緒に住んでいる事を。二人とも俺の話に口を挟むことなくじつと聞いてくれた。

「まさか、ルシフェルが魔王とか・・・」
「いや、でもさっきの見れば理解出来るだろ？」

陽一が「確かに」と言っただ魔王を見た。すると魔王は陽一を見て呟いた。

「余が怖いか？余が魔王だと怖いか？」

何時にもなく弱気な魔王に俺は少し驚いた。寂しそうな顔をしている。初めて一緒に学校に行ったあの時のように。そんな魔王を見て二人は顔を横に振った。

「な訳ないだろ？ルシフェルが魔王だとしても、俺達がルシフェルを怖がる理由はない！」

「そうだね。ルシフェルは僕達に危害を加えないし、加える事はないと分かっているよ。だって、友達だから」

「・・・礼を言う。ありがとう、翔太。陽一」

二人の台詞に魔王は嬉しそうに微笑んだ。もしこの場に女子が居たら絶対悩殺される様な微笑みだった。

「とういかさ、セイギも黙ってるとか水臭いよな」

「そうだね。酷いって言うか、セイギは何事にも慎重すぎるんだよ。大体さいつも一人で何とかしようとするし」

二人が標的を俺に変え俺の悪い所を上げだした。

「仕方ないだろ！行き成り「こいつ魔王なんだ」と紹介したら頭がおかしい奴と思われて、精神科に直行だぜ？」

俺が声を上げて反抗すると、二人は顔を合わせて俺に詰めよった。

「だからって、こんな重要な事を一人でどうにか出来ると思ってるのか？俺が言うのもなんだけど、絶対無理だと思う」

「セイギじゃ絶対に無理だよ。いつか絶対ボロを出す」

「言いたい放題だな・・・」

二人に指摘されたが、確かにこの先俺一人でやっていけるか心配だった。誰にもばれないように。誰にも迷惑かけないように頑張ろうとしたけど、さすがに限界がある。

俺が黙って俯いていると、陽一が俺の肩をポンと軽く叩き、目線を合わせるようにしゃがんだ。翔太は俺の隣に座り、俺の肩に手を置いた。

「親友なんだから、俺たちにも協力させるよ」

「仲間が多いと、いろいろと助かると思うしね」

お前ら・・・

俺は俯いて考えた。迷惑を掛けるのは気が引けるけど、仲間が多い方がいい。そうすれば俺の負担もストレスも減る。魔王だって俺以外にも気兼ねなく話せる相手が必要な筈だ。

それらの考えを一瞬でまとめ、俺は二人に協力してもらおう事にした。

「じゃあ、頼もつかないかな？なあ、魔王」

「余はいいぞ？翔太も陽一も余にとって大切な友達だからな」

魔王がそう言うと翔太と陽一は魔王に抱き付いた。

「ルシフェル！お前いい奴だな！」

「俺たちにとっても、ルシフェル君は大切な友達だよ！」

「翔太！陽一！」

三人は涙を流し合った。俺はその光景を他人のフリをして見ていた。何故なら周りの視線が痛いからだ。家族連れは「ママー。あれ何？」と子供が質問すると「青春よ！青春！」。「俺も若い頃は・・・！」と母親と父親がいきり立ち、散歩中であろう老人は、「若いっていいわね〜」「本当じゃな〜」とほのぼのと俺達を見送っていた。

さすがに恥ずかしくていたたまれなくなり、俺は一人でその場から逃げるように歩き出した。三人はまだ抱き合っていたが、俺がいないと気付くと後を追って来た。

「何だよセイギ。先に一人で行くなんて酷い奴だな」

「協調性がないよ」

「グループ行動が苦手なんだな」

三人の文句に俺は後ろを振り向いた。

「少しは周りを気にしろよ。見てるこっちが恥ずかしい！」

TPOを考えろ！という俺の叫びが公園に響いた。しかし、陽一はきよとんとしていた。

「何で恥ずかしいんだ？」

ええー。何この人。この人羞恥心というものが無いのー？と、俺が引いていると陽一は「ま、いつか」と言っつて魔王と肩を組んだ。

「俺達だけの秘密だな！」

「そうだな！四人の秘密だな！」

四人の秘密。俺はその言葉が怖くなった。余計な仕事が増えそうな気がして、この先が心配になってきたからだ。未来なんて誰にも分からないけど、嫌な予感しかない。

でも、これでよかったのかもな。俺の気も少しは楽になったし。俺は三人を見て顔をほころばせた。

第六話 四人の秘密（後書き）

読み返して終わり方が納得いかなかったため書き直しました。

第七話 魔王VS退魔師 その1

酔っ払いのサラリーマンやOLが店をハシゴする夜の街。そしてネオンが煌めく街のその路地裏。夜の闇に溶け込むように佇むその人物は、手にこの国では違法と呼べる代物を持つていた。人を傷つけない分にはいいが、もしソレが人へと向けられたらこの人物は捕まらるべきである。しかし、この人物は人ではなく悪魔にソレを向ける。曲線美によって描かれた弧が空を切り、黒い影に刃先を向けた。

『ヤ、ヤメロ』

黒い影が路地裏の隅に追いやられ、喉元に剣先を向けられていた。

「残念ながら悪魔に耳を傾ける義理は持ち合わせておりません」

『クソエクソシストガ!』

「何とでも言いなさい。負け犬の遠吠えにしか聞こえません」

暗闇から長剣を持った人物が現れた。闇に溶け込むような黒い服を着た人物は、黒い影の正体である悪魔が言った台詞に嘲笑した。そして次の瞬間、懐から聖水の入った小瓶を取り出し悪魔に向けた。悪魔は悶え苦しみながら、耳をつんざく様な叫び声を上げ転げ回った。

「後悔しても遅いです。アナタは命を奪い過ぎた」

両手で剣の握り大きく振り上げ、悶え苦しむ悪魔目がけて剣先を振り下ろした。

ザンッ

夜の街にコンクリートの地面に剣が突き刺さった音が響いた。しかしその音は賑やかな表の街には聞こえない。闇がその音を掻き消した。

「中級悪魔、退魔完了」

全身黒尽くめの人物が剣を鞘に戻した。そして空を見上げる。

「感じる。この街に大きな魔力を・・・」

黒尽くめの人物は再び夜の闇に溶け込むように消えて行った。後には何も残る事はない。そう、闇以外は

一日の授業が終わり、特に部活にも所属していない俺と魔王は早々に帰る事にした。魔王は色々な部活に勧誘されているが、大して興味もないらしく断っている。俺としては魔王が何をやらかすか不安なので良かったが、四六時中一緒にいるのも疲れる。

「おйлシフェル。お前たまにはクラスの奴らと帰れよ」

「だがセイギが怒るではないか」

「変な事言わなければ怒らない」

「それは保障出来ぬな」

「少しは努力しようとするよ」

まあ、期待はしていなかったけど、と俺は深く溜め息を吐いた。横で魔王が幸せが逃げるぞとか何とか言ってるけど、もうとつくに幸せに逃げられているさ。それどころか現在進行形で不幸に見舞われている。

だが俺に幸せが逃げると言った本人も溜め息を吐いた。ていうかこいつが溜め息を吐いた所初めて見たんだけど。

「しかし、こつ毎日監視されると疲れるな」

「ふーん、監視ねえ……え？監視？」

「ああ」

魔王の言葉に思考を停止した。監視って誰かに見られているって事か？俺が思わず後ろを向こうとしたら、魔王に振り向くなと制止された。

「何だよ監視って」

「後をつけられている」

「え、ちょ、マジですか」

「2日前からだ」

「お前のファンじゃね？」

「いや。それにしても気配を消すのが上手すぎる」

気配を消すのが上手いって……ま、まさか殺し屋とか？いや、でも狙われる理由何て思い当たらないし。

「でもほら、例えば気配を消すスキルを持つファンとか」

自分で言ってアレなんだが、どんなファンだよ。そんなファン普通はないし。いや、いるかもしれないけど、いない事を願おう。

「この気配は違う」

「え？気配で分かる訳？」

「ああ」

今サラツと凄い事言ったな。あ、コイツ魔王だった。ハハツと笑うと魔王に行き成り右手を掴まれた。

「こつちだ」

「え、ちよっ」

魔王が俺を引つ張りどんどん先に進んで行く。するといつも通らない道を進みだした。

「撒くぞ」

わかった、と俺は目で返事した。暫らく二人とも無言で歩き続け、角を曲がった所で走り出した。後ろから慌てて走り出す足音が聞こえる。うわ、マジでいるよストーリーカー！

美形は大変だなあ、と思っっていると魔王が指を鳴らした。しかし特に変化はなく魔王は何故か走るのを止めた。

「おい、逃げなくて「シツ」・・・」

魔王に逃げないのかと聞こうとしたら、人差し指を口元にあて、静かにしろと言ってきた。足音が近くなり俺は息を飲んだ。そして角から現れた人物に呆然とした。

「見失った・・・」

何と俺達を付けていたのは、腰まである黒髪のセーラー服を着た美

少女。セーラー服より着物が似合いそうな子だ。少女はあからさまに落ち込むと、来た道に戻って行った。

隣にいる魔王に目をやると、魔王は何故か厳しい目つきで見ている。

「何であるの子は見失ったって言ったんだ？俺達目の前にいたのに」

「ああ、透明になる魔術を使った」

なら最初から見えよと思った。しかし大人しそうな子だったな。それに結構可愛いし。俺がそう言っていると魔王が意外そうに訊いてきた。

「セイギはああいう娘が好みなのか」

「いや、好みって言うか単に可愛いって思ったただけだし。それにしてもあんな大人しそうな子がストーカーとかするんだな。いや、案外大人しそうな子がストーカーとかするのかな？」

「・・・」

俺が考えていると魔王は難しい顔をしていた。珍しいこいつがこんな顔するなんて。

「あの娘・・・もしかしたら・・・」

「ん？知り合いか？」

「いや、そう言う訳ではない。だがまだ確信が持てない。まあ確信した所で特に害はないのだが」

魔王はブツブツと何か言いながら歩き出した。大丈夫かあいつ、と思いつながら魔王の後を追って家に帰った。

そして次の日。

魔王と一緒に登校し教室に入ると、また皆それぞれ固まって何か話していた。しかしルシフェルに気付いた女子がルシフェルとついでに俺に挨拶してきた。そして俺達に気付いた翔太と陽一がこちらにやって来た。

「おはよ」

「おはよー。何かあったのか？」

「何かね、また転校生みたいだよ」

「ハハハ・・・またか」

「しかも今度の転校生は女子らしいぜ」

「また島崎が発信源？」

「うん」

そうかまた転校生か。いや、今度の転校生は前から決まっていた筈だから、本来はまたではない。魔王がいなければ皆が集まって何か話している光景も、島崎が偵察に行くのも一回だけで済んだ筈だ。俺はアハハハと乾いた笑いを漏らした。

暫らくしてから諏訪先生が来て出席を取り始めた。そして皆がお待ちかねの転校生を紹介する時がやってきた。

「えー。皆もう知っていると思うが、転校生がいる」

諏訪先生が島崎を見ながら言った。島崎は満面の笑みで諏訪先生を見た。どうやら諏訪先生は島崎が皆に報告していると知っているらしい。

「じゃあ入ってきてくれ」

諏訪先生がそう言うと教室の扉が開き、廊下から転校生が入って来

た。皆は転校生が美少女なのを驚いているであろう中、俺は別の意味で驚いていた。何と転校生は昨日のストーカーの子だったからだ。俺は魔王に話しかけた。

「お、おい。あの子昨日の」

魔王は大して気にしてないらしく「そうだな」と言っただけだった。まさか魔王を好きすぎるあまり転校してきたとか？だとしたらすごい行動力だ。あれ、こういう場合は怖いと言った方がいいのか？諏訪先生が黒板に転校生の名前を書いて、転校生に自己紹介を促した。

「初めまして、いちじょうしたせいの一条環と言います。皆さま宜しくお願いします」

見た目を裏切らない丁寧な自己紹介に男子はテンションが上がり、女子はお嬢様かな？とかライバルが増えたわとか言っている。

「え、一条の席は・・・呉羽の後ろが空いているな」

は？と俺は後ろを見た。そこにはいつの間にか用意されている机と椅子。気付かなかった。あれ？さっき置いてあったっけ？

俺が思い出そうと考えていると、頭の上に影が落ち顔を上げた。そこにはいつの間にか転校生がいて丁寧にお辞儀してきた。

「よろしくお願いします」

「あ、うん。よろしく」

転校生は隣の魔王にも挨拶をして静かに席についた。魔王は転校生を一瞬見たがそれ以来視線は黒板に向かっている。やっぱりストーカーが気になるのか？まさか逆に惚れたとか？

ホームルームが終わり恒例の質問タイムがやって来た。皆転校生の所に集まりワイワイと話している。女子よりも男子が多いのは仕方がない事だ。何せ相手が美少女だからな。そして俺はそれを翔太の席から見ている。ほら、俺って人ごみとか苦手だから。陽一は一目惚れしたらしく、ホームルームが終わったら真っ先に転校生のもとに来ていた。あいつの一目惚れ体質は一生治らないな。

「何処から来たの？」

「京都からです」

「へ。でも訛りとかないね」

「中学生までこちらに住んでいたんだけど、家の事情で京都に引越したんです。それでまた家の事情でこちらに戻って来たんです」

「敬語じゃなくていいのに」

「ついクセで」

「じゃあ徐々に直していけばいいんじゃない？」

姿勢も良く言葉づかいも良いし、終始笑みを絶やさない。本当にお嬢様みたいだ。転校生が茶道や花道をしているのを想像したのは俺だけではあるまい。

「綺麗な子だね」

「お、翔太もしかして惚れた？」

「そういうセイギはどうなのさ」

「俺は単に綺麗だなんて思っただけ」

それにあの子魔王のストーカーだしとは言えずにいた。もしその事をクラス中の男子が知ったら、彼らを絶望のどん底へ突き落とす事になるだろう。

そして一日の授業が過ぎ放課後。俺と魔王は昇降口の下駄箱にいた。周りに人気はなく、静まり返っている。

魔王が図書室で何を借りるか迷っていたから遅くなってしまった。俺は腕時計を見て溜め息を吐いた。もう4時50分だ。

「次からは何を借りるか決めてから借りろよ」

「仕方がないではないか。どれもこれも読みたいものばかりなのだから」

魔王がそう言いながら下駄箱を開けた瞬間、中から何かがするりと落ちてきた。魔王がそれを拾うと白い封筒で宛名に「ルシフェル君へ」と書かれている。またラブレターかよと俺は魔王を小突いた。

「お前も罪作りな奴だなあ。一体何人の女子を虜にしたんだ？」

「・・・これは・・・」

魔王はいつものように惚けた顔ではなく、真剣な表情で封筒を開けた。そして三つ折りにされ入っていた一枚の紙を広げた。魔王はそれを見た瞬間厳しい顔つきになった。何が書かれているか見ようとしたら魔王はそれを勢いよく破った。

「あ！おい！何してんだよ！」

「・・・セイギ。先に帰っていてくれ」

「は？お前何言ってる・・・あ、もしかして今から会いに行くのか？」

俺がそう言つと魔王はニコリと微笑んだ。だけどその笑顔に違和感を覚えた。

「そつだ。4時30分頃体育館裏で待っていると書いてあった。も

う過ぎていゝるが行つてくる」

「そ、そうか」

俺は体育館裏へ向かう魔王を見送つた。しかしあの時感じた違和感を無視することが出来ず、俺はある程度距離を保ちながら魔王の後をつける事にした。

俺は物音を立てないようにそつと体育館の角から覗いた。そこには魔王が背中を向けて立っていた。俺は告白してきた相手は誰だろうと見て驚いた。声を出さなかつただけマシだろう。

何故なら魔王の前には今日、俺達のクラスに新しく加わつたあの転校生がいたからだ。

第八話 魔王VS退魔師 その2

空はとつくに茜色に染まっており、どこからか5時を告げる鐘の音が聞こえてきた。遠くから野球部の掛け声が聞こえてくる。

転校生は左手に分厚い本と右手に細長い棒状の物を持っている。良く見ると木で出来た身丈ほどの長さの杖だ。

「さすが悪魔です。約束も守らないなんて」

「約束した覚えはないのだが」

転校生はキツと鋭い目で魔王を睨んだ。

「黙りなさい！インキュバス！」

インキュバス？俺はどこかで聞いた事のある言葉に頭を捻った。

「どうせ学校中の女子生徒を虜にしようと企んでいるんでしょうけど、そうはさせません。私が退治いたします！」

転校生は杖の柄頭を魔王に向けた。左手の分厚い本が淡く光り出し、それに呼応するように杖も光り出した。

「・・・やめておけ。お前では余に敵わない」

「軽口を叩けるのも今の内です！」

転校生は何かの呪文を唱えだした。呪文かどうかは分からないが、本を見ながら長ったらしい文を読み上げていく。

「ファイヤーウォール
炎の壁」

転校生が最後にそう言うのと杖の先から赤い光の球体が現れた瞬間、魔王を囲むように周りに炎の壁が出来た。炎の壁は魔王に迫り始める。しかし魔王はそれを手で振り払う動作をし、炎の壁は一瞬で消えてしまった。

「なっ！」

「校舎に燃え移ったらどうするつもりだ」

「っ悪魔のくせにつ！」

転校生が今度は水の壁を出現させた。しかしそれも一瞬で魔王に消されてしまった。転校生はそれを呆然と見つめた。

「大した力もないのに挑んでくるのは愚か者のする事だ」

魔王が右手を掲げると黒い球体が現れた。球体は徐々に大きさを増し、等身大の大きさになった。

「安心しろ。一瞬だ」

そう言つて魔王がその球体を転校生に放とうとした瞬間、考えるよりも体が動いた。二人の間に飛び出してきた俺に気付いた魔王が目を見開き、転校生が驚きの声を上げる。

全てがスローモーションのように感じ、そして自分の体が重く感じた。魔王の手から黒い球体が俺に向かって放たれ、魔王が青い顔をしながら球体を追いかけるように足を踏み出す。

ぶつかる、と思った瞬間。俺の両脇から生えるように二つの腕が出てきて、俺の前に透明な膜を作った。そしてその膜に黒い球体がぶつかり、その後激しい爆音と爆風に俺は吹き飛ばされた。

その勢いで何度か地面に激しくぶつかり、余りの激痛にどこか骨折しているんじゃないかという不安に襲われた。痛み悲鳴を上げる体に鞭を打ち、無理やり体を起こし辺りを見回す。土煙のせいで視界がまったく利かず、周りの状況が全く掴めない。俺は二人が無事かどうか名前を呼んでみた。

「ルシフェル！転校生！」

すると土煙の向こうからルシフェルの声が聞こえた。どうやら無事のように。

安堵した後、転校生から返事が無い事に気付いた。きっと俺の両脇から出てきたあの腕は転校生だ。転校生が多分バリアのようなもので俺を守ってくれたんだと思う。

俺は転校生の名前を呼んだ。いや、呼ぼうとしたが転校生の名前を度忘れした。やば、今で頭打ったか?!え、え〜っと、確か・・・い、一条、あ、そうだ!一条だ!

「一条さん!?大丈夫ですか!?!」

俺が叫ぶと俺の後ろの方から声が聞こえた。後ろを振り向くと、少し離れた所に土煙でよく見えないが見える。俺は力を振り絞り何とか立ち上がり、その手の主の所に急いだ。

「一条さん!しっかり!」

そこには一条さんが頭から血を流して倒れていた。気を失っているらしく、目蓋もすっかり閉じられて目を明けそうもない。

「セイギ・・・っ!」

気がつくのと背後に魔王がいた。魔王は顔から血の気が失せ、今にも泣きそうな顔をしている。魔王を見た瞬間、腹の底から怒りが込み上げてきた。怒鳴りつけたい衝動に駆られたが、駄目だと気持ちを鎮める。

今は一条さんを助けなくては。

「・・・お前回復魔法とか使えんだろ。転校生が怪我したみたいなんだ」

「わ、分かった」

魔王は俺の言う事を大人しく聞き、一条さんに手をかざした。魔王の手と一条さんの体が淡く光り、頭の傷も消えていった。俺は安堵の溜め息を吐き、気持ちを落ち着かせた。

「セイギ怪我は？」

「折れてはいないみたいだ。打撲とかはしてんだらうけど」

魔王は何も告げず、俺にも回復魔法をさせた。あ、魔術だったか。すると土煙の向こうから、きつと爆発に気付いたんであろう人達の声が聞こえてきた。

「ここにいるとマズイな。お前どうせ転送魔法使えんだろ。一先ず家に帰るぞ」

俺は一条さんを背負い、魔王と向き合った。魔王が指で弧を描いた瞬間、景色が一瞬で変わり、いつの間にか家の前にいた。俺は何も言わずに玄関を開け、リビングのソファーに一条さんを寝かせた。鍵が掛かっていたから母さんは出かけているようだ。

リビングの隣にある和室に魔王を呼び、テーブルを挟んだ正面に座るように促すと魔王は大人しく正座した。

「・・・お前自分がした事分かってんの？」

「あれは仕方がない。彼女は退魔師だ。殺らなければ殺られる」

「・・・殺らなければ殺られる？だからって殺し返す必要はないだろ」

「だがそれが普通だ」

「は？普通？馬鹿言ってるじゃねーよ。そんなのが普通であって堪るか。そんなのが普通だったらこの世は終わりだ」

「悪魔と退魔師との間では普通なのだ。狩られる側と狩る側。狩る側と狩られる側。要は命の奪い合いだ」

「じゃあ、俺がお前を殺そうとしたら俺を殺すのか？」

俺の問いかけに魔王はキツと睨んできた。

「それは！・・・出来ない。セイギは余の友達だから」

「・・・俺だつて出来ない。もしお前に殺されそうになったらお前を止める。例え傷つき傷つけられても」

俺は真つすぐ魔王を見た。魔王も俺をジツと見ている。

「お前は覆したいんだろが・・・魔王が悪だと言う事を」

その為にここにいるんだろ。俺がそう言つと魔王は頷いた。

「そうであったな。余とした事が・・・今まで殺らなければ殺られると言う事しか知らなかったから・・・。そうか、殺さなくていいのか・・・」

魔王が苦しそうに笑いながら言った「殺さなくていい」という言葉が重く押し掛かった。こいつは魔王で魔界の頂点にいるからあまり

身の危険とか関係ないんじゃない？

「お前魔王なのに何で殺すとか殺さないとか」

「魔王だからだ。魔王になる為には余計な物、邪魔な物は全て切り捨てなければならぬ。心も感情も肉親や兄弟まで。魔王は完全な存在で絶対でなければならぬのだ」

俺は言葉を失った。

魔王は誰よりも強く気高く、誰よりも孤高でなくてはならない。弱みや弱点があつてはならない。それが理由でいつ殺されるか分からないから。もし殺されそうになったら殺し返す。それが普通。それが魔界の掟。

魔王はそう語った。

こいつは知らなかった。無知は罪という。じゃあ、

「今から知ればいい。弱み弱点があつてもいいって。逆にそれが強みになる場合もある」

「強みに？」

「ああ。きつといつか分かる日が来る筈だ」

俺がニコリと笑うと魔王もつられて笑った。こいつは知らないんだ。だったら教えてやればいい。簡単な事だ。

すると、めでたしめでたしと締め括りたいような和やかな雰囲気壊すように第三者の声が聞こえた。

「魔王・・・どうりで魔力が桁外れだと思いました」

気付くと一条さんがそこにいた。一条さんも正座し、自己紹介をし

てきた。

「改めまして、一条環です。退魔師しております」

「あ、呉羽正義です。そんでもってこいつは魔王でルシフェル。学校では俺の従兄弟として通しているけど」

ルシフェルは一条さんを見据えた。一条さんもルシフェルを睨みつける。

「まさか悪魔に回復されるなんて夢にも思いませんでした」

「それは嫌味か小娘」

魔王がそう訊くと一条さんはフンと鼻先であしらいこちらを向いてきた。

「呉羽さんは何故魔王と一緒にいるんですか？」

い、痛い所を突かれた。彼女は退魔師だから嘘をつくわけにはいかないし。正直に答えた方がいいだろう。

「えーと、俺が召喚しちゃったんだ」

「は？」

一条さんが口をぽかんと開け唾然としている。そして姿に魔王は呑気に吹きだしていた。お嬢様が呆気にとられている姿が面白かったのだろう。

「魔王を召喚？貴方が・・・？」

「は、はい」

居た堪れない雰囲気に冷や汗が出てきた。一条さんはコホンと咳払いをし、「そうですね」と言った。

「普通、魔王位の存在を召喚するには、対等の力を持つ者にしか召喚出来ないと聞いていたのですが……。ま、まあいいでしょう。話を変えます」

一条さんは真剣な表情で俺に訊いてきた。

「単刀直入に言います。何故ここに魔王がいるのですか？」

「こいつが人間界で暮らしたいって言うから……」

「そ、それだけ……？」

「それだけ。あ、あとは魔王が悪ではないって覆したいらしい」

一条さんは魔王を見た。魔王は腕を組んでうんうんと頷いている。

「魔王が悪ではないと……。覆したい……。？そんな馬鹿な……。ななな」

「い、一条さん落ち着いて！」

言動がおかしくなった一条さんを何とか落ち着かせ話に戻った。

「つまり、貴方は魔王が気の済むまで人間界に暮らせると」

「まあ、そう言う事になります」

「魔王ですよ？」

「魔王だけど」

一条さんは納得していないらしく身を乗り出して俺の説得に試みだした。

「相手は魔王ですよ？怖いと恐ろしいかそういう気持ちは無いんですか？」

「ま、まあ最初は思ったけど今は別に」

「相手は悪魔なんですよ！いつ寝首を掻かれるか分かりません！」

「こいつはそんな事をする奴じゃないし、もしそれが目的なら今までチャンスが沢山あったのに実行しなかったのが不思議だよ」

俺が笑いながら言うと一条さんは力なくへたりと座り込んだ。

「そんな、まさか。魔王と友情を育んだとでも言っんですか・・・？」

「そうなんじゃないか・・・？」

あれ？今思うと常識的に考えて魔王と友達になるなんてあり得ないよな。いや、そもそもこいつが魔王とかあり得ないんだ。

「そうですか・・・なら」

一条さんが行き成り立ち上がり、魔王を指差した。

「貴方が魔王を悪だと覆したいというのなら、私が貴方を監視します！もし皆に危害を負わせたら私が貴方を成敗いたします！」

一条さんの宣言に今度は俺がぼかんと口を開けた。魔王はニツと笑うと立ち上がった。

「ほう。余を監視するだと？大した実力もないのにいい度胸だ」

「ちよっ？ルシフェル？」

「あ、あれは少し油断しただけです！それに約束出来ないと言うつもりですか？なら今すぐ私が「なら頼もう。余が間違った事をしな

いように見張っていてくれ」

魔王が一条さんを遮り握手を求めるように手を差し出した。一条さんは一瞬驚いた顔をしたが、その手を取り握手をした。

「・・・望む所です！」

二人は互いを見つめた。何も知らない人が見たら、美男美女の恋人同士が仲良く握手しあっている様に見える。
いや、でもさ・・・。

「一条さん？君は退魔師なんだろう？そんな事言っているのか？」

「そうですね。こんな事、普通はあり得ません。ですが、この者からは悪意を感じられないのです。ですから・・・」

信じてみようと思いました。

一条さんの言葉に俺はホツとした。話が分かる人でよかったよ。もし行き成り殺し合いが始まったらどうしようと思った。
それから俺は一条さんに言いたかった事を言う事にした。

「一条さん。さっきはありがとう」

「え？」

「さっき俺を守ってくれただろ？」

「あ、結界のことですね。行き成り飛び出してきたのでビックリしましたけど、市民を助けるのは義務ですから」

「でも助かったよ。ありがとう。その結界がなかったら俺どうなっていたが分からないし。本当にありがとう」

一条さんは顔を赤らめて俯いた。どうやら照れたようだ。

「い、いえいえ。私はあたり前の事をしたままで」「うん」

あ、何かいい雰囲気だなと思った瞬間、魔王がぶち壊した。

「それよりセイギ。腹が減った」

「お、お前少しは空気読めよ」

「空気を読む？空気ぐらい読める。今だって読んだではないか」

「・・・はあ」

すると俺達の会話を聞いていた一条さんがフフッと小さく笑いを零した。

「い、一条さん？」

「あ、すいません。あまりにも魔王に見えなくて」

やっぱり誰から見てもこいつは魔王には見えないよな。と俺もつられて笑った。魔王は俺達を見て不思議そうな顔をしている。

「何だ二人とも。余を見ながら笑って・・・失礼だぞ！」

魔王が頬を膨らませムツとした。きっと自分だけ蚊帳の外だと思っただけだろう。

ただ俺もこいつが魔王に見えなくなってきた。むしろこいつが魔王である事がおかしいような気がしてきたのだ。

「では、魔王ルシフェルと・・・えーと・・・」

「呉羽です・・・」

「す、すいません！まだ覚えきれなくて。ええと、呉羽さん。これから宜しく願います」

一条さんは深くお辞儀をしてきた。俺達もお辞儀をした。いや、お辞儀を知らない魔王の頭を掴みお辞儀させた。魔王は「何をする！」と言って怒ったが、これが挨拶だと教えると納得したようだ。

ルシフェルが魔王である事を知る人間が増える事で少しは楽出来ると思っていたが、逆に苦労が増えた様な気がしたのは気のせいではないだろう。

「そいえばインキュバスって何だ？」

「淫魔だ」

「い、淫魔？」

「^{ムク}夢魔ともいいます。男性型女性型に別れ、男性型は女性に子を産ませ、女性型は男性を誘惑して精を奪うんです」

「へ、へえ・・・」

淡々と言う一条さんが少し怖いと思ったのは俺だけではあるまい。

第八話 魔王VS退魔師 その2（後書き）

やっと女の子が出てきた。やっぱり女の子がいた方が華やかでいいですね。

というか今回も急展開で詰め込みすぎましたでしょうか・・・。

第九話 魔王と正義 走る！

小学校や中学校とは違い、6月から7月位に体育祭を開催する高校が多い。何故暑苦しいこの季節に行くのかと講義したいところだ。という訳で我が校も今、三週間後に体育祭を控えているという現状にある。

そして今日。学校で体育祭で出場する種目を決めた。因みに色は赤色。隣の魔王は「ほう、赤か・・・燃えるな」と何か意味の分からない事を呟いていた。

出場する種目は、俺と翔太と陽一と魔王は綱引きと騎馬戦に出る事になった。それから翔太と陽一は障害物競走に出て、俺と魔王は体育祭のトリを飾る競技、色別対抗リレーに出る事になった。何故俺がリレーに出る事になってしまったかというと、ジャンケンで見事に負けたからだ。最悪だ。俺走るの苦手なのに。何て運の悪い日なんだろうか。

ジャンケンした時の事を考えていると陽一が溜め息を吐いて愚痴をこぼし始めた。

「嫌になっちゃうよな。この蒸し暑い時に体育祭なんて。大体何で体育祭なんだ？別に祭って付ける必要無いんじゃないか？」

「馬鹿だな陽一。体育大会とか体育会とかだとやる気無くすだろうが。日本人は祭好きだから取り敢えず祭付けとけみたいな感じになつたに決まってるだろ」

そう言うと翔太が「それはないんじゃないかな？」と言った。いや、絶対にそうに決まっている。生徒に少しでもやる気を出させるようにあえて祭をつけたに違いない。まあ祭なんて付けなくてもやる気は出ないけどな。

「あーもう！何でもいいから中止になんねえかな」

「同感。雨でも降ればいいのにな」

「だが今一生懸命頑張っているのに当日雨が降ったら全てが台無しになるんだぞ？水の泡になるんだぞ？それでいいのか？」

魔王がそう言うと翔太は黙った。確かに一生懸命頑張ったのにも関わらず、当日全てが台無しになったらその怒りを何処にぶつければいいんだ？

「それに運動すると気分がスッキリするぞ。皆で一つの目標を成し遂げた時の達成感は気持ちが良いぞ。それに余は体育祭をやりたい！騎馬戦とかリレーとか面白そうではないか！いいではないか青春！」

と目をキラキラ輝かせて熱弁する魔王に俺達は「あ、ああ」と頷くしかなかった。

これだから青春バカは熱くて困る。すると話題を変えようと翔太が話出した。

「そう言えば、ルシフェル君は応援団に選ばれたんだっけ？」

「ああ。面白そうだから自分で立候補したのだ」

「そうだな。凄い勢いで女子から推薦されてたな」

あの時の女子は怖かった。目が獲物を狙う獣の様にギラついていた。

「あゝあ。それじゃまた体育祭が終わったらルシフェルに告白する女子増えるだろうなあ・・・俺にもその幸せ分けてくれよ」

「別にいいぞ？でもどうやって分ければいいのだ？」

「何だその余裕っぷりは！俺が余計惨めじゃないか！これだからイ

ケメンは！じゃあ明日な！」

陽一は泣きながら家の中に入って行った。というかいつの間にか陽一の家に着いていたとは、全然気付かなかった。

「あいつは気にしなくていいよ。いつもの事だし。じゃあ、僕もこれで。また明日」

「もとより気にしていないが。じゃあ明日な」

そう言つて翔太も家の中に入った。実は翔太と陽一の家は真向かいなのだ。

「お前あんまり陽一苛めるなよ」

「苛めておらぬぞ。本当の事を言つたままでだ」

それが苛めてるつて言うんだよ。いや、むしろお前の存在が男子にとって苛めだ。可哀そうな陽一を思い浮かべながら俺と魔王は家に着いた。

そして次の日の放課後から体育祭の準備と練習が始まった。

それぞれ色ごとに分かれて顔合わせとなった。三年生の団長が挨拶する。

「えゝ初めまして。赤組代表の戸田です。よろしく」

「副の早野です。因みに俺と戸田は応援団にも入っているんでよろしく」

「えゝ皆も知つての通り、色は一年から三年の組ごとで分かれている。我々二組は赤組になった。他の組に負けてはいられない！皆で

一緒に優勝しようではないか！皆！頑張るぞ！！！」

熱過ぎる団長に皆は固まっていた。いや、引いていた。何この熱過ぎる人。今時こんな人がいるんだな。

皆から返事が無かったので団長はしょぼくれていた。ああ、可哀相に。

すると感化された魔王がいきなり叫び出した。

「頑張ろう！！！」

魔王がそう言つと女子が「そ、そうね！頑張らしましょう！」「皆頑張るわよ！」と叫び出した。そしてそれに釣られてか、他の生徒も声を上げだした。さすがイケメン。周りへの影響力が半端ないな。すると元気を取り戻した団長が再び声を上げた。

「よし！優勝は俺達紅組だ！」

「「「おーーーー！！！！！！」」」

「と叫んだのはいいものの、ぶっちゃけ優勝できる見込みある訳？」

応援合戦で使う小道具を作っている最中に陽一がぼつりと呟いた。応援合戦は組ごとで旗や小道具を使って自分達のやる気や強さをアピールする競技だ。

「そうだね。三年の戸田先輩は柔道部の主将。騎馬戦では有利だろうし。副の早野先輩は剣道部に所属しているよ。それから僕達クラスにはバスケの部員が多いし、一年には野球部の人もちらほらいたね」

「よく知ってるな」

「あとルシフェル君がいるしね」

「そうだな。期待しているぜルシフェル」

「うむ。期待に応えようではないか」

「はは。調子に乗るな」

そう言うと魔王はセイギも頑張るのだぞと言ってきた。

そうだな。俺もリレー出るんだしな。

・・・

・・・

・・・ん？ん？リレー???

その瞬間俺は絶望感に襲われた。昨日決まった事なのにリレーの事をもう忘れていたのだ。

マジありえないんだすけど・・・。

それからの俺は何をやっても身に入らず、学校が終わるまで殆ど抜け殻状態であった。

そして気付いたら家にいた。しかも風呂の湯船にちゃっかりと浸かっている。すると自然に独り言を呟きだした。

「はあ・・・何で俺がリレーの選手？他に走りが得意な奴いるじゃんかあ・・・島崎とか島崎とか？」

あれ？島崎しか出てこない。おかしいな。

とにかく、決まったからにはどうしようもない。腹を括ろつ。魔王に走りが早くなる魔法を掛けて貰うとか、ああでも駄目だな。魔王がいいよと言わない。

それにそれやったら罪悪感でいっぱいになりそう。俺、小心者だから。

はあ、こうなったら・・・

「え？走る？」

次の日の朝。起きてきた母さんに事情を説明した。すると母さんは頑張れと応援してくれた。何だか照れ臭い。

家を出て、まず初めに準備体操。それからスタート。

日はまだ登っていないが、徐々に明るくなってきている。人気も無く、ごくたまに自動車が通る位だ。

走り出して暫らくして、何でかわからないけど凄くわくわくしている事に気付いた。まるで世界に自分一人のような感じだ。

やば、テンション上がった。

颯爽に走る俺は心の中で「風になるぜ」とか調子に乗っていた。

公園の中を走り抜け、海沿いの道も走った。

丁度朝日を目にして、その光景に感動した。海から顔を出した太陽に照らされて海面がキラキラと光る様は絶景だ。何だか知らないけど、太陽に力を貰っている様な気がする。

朝日を見るのに夢中になっていた俺は時間を忘れていた。ふと時計に目をやるといつも自分が起きる時間。

そろそろ帰るか、と帰りは違う道を通って家に向かった。出勤するサラリーマンやOL、車が増えだした頃に家に着き、シャワーを浴びて朝食を取る。

そして魔王が起きてきて、魔王は自分より早く起きている俺に驚いていた。すると血相を変えて俺に近づいてきた。

「どうしたのだセイギ！どこか具合が悪いのか?!」

「何でそうなるんだよ・・・」

「正義はジヨギングしてきたのよ」

母さんが焦る魔王に説明した。すると魔王はジヨギング？と頭を傾げた。

「今さつき走って来たんだよ」

「な、何だと？セイギは走るのが嫌いだと言っていたではないか」

「だからだよ。俺あんまり走るの得意じゃないから・・・皆に迷惑掛けれないし」

「セイギ・・・そなた・・・！偉いぞ！」

「お、おお、そうか・・・？」

感動した！と叫ぶ魔王に少し驚いた。誰かに褒められるって・・・本当に照れ臭い。

それから次の日の朝。「余も一緒に走るぞ！」と言って魔王も一緒に走る事になった。誰かと一緒にサボることもないだろうと俺は快く了承した。

「誰もいないな」と魔王が走りながら呟いた。キョロキョロと辺りを見回している魔王に俺は昨日思った事を言ってみた。

「世界に俺達だけみたいだろ？」

「こ、怖い事を言うのではない！」

「え？怖い事か？」

「世界に余達だけというと、加奈子殿や翔太や陽一も皆いないとい

う事になるのだぞ？寂しいではないか！」

と必死に言う魔王にそんなに真に受けるなよと思いながら俺ははにかんだ。

本当にこいつは恥ずかしい事をさらつと言つな。まあ、それがこいつのいい所なんだろうけど。

「おお！海が綺麗だ！セイギ朝日だぞ！」

海から顔を出した太陽を見て子供みたいにはしゃぐ魔王。多分初めて見たんだろう。目がキラキラと輝いている。

徐々に出てきた太陽の光が海に反射してキラキラと光り、強い光を放つ太陽が海からすべてを曝け出す。

俺は昨日も朝日見たからそんなに感動しないけど、やっぱり綺麗だよな。

「良いな人間界は！綺麗なものがありすぎだ！」

「そんな事言つて、侵略してくるなよ」

「する訳が無い。余は悪ではないのだから！」

そうだったな、と言つて二人で朝日を見て家に向かった。

それから魔王と一緒に毎日走り続けた。

学校では体育祭の練習をしてたくたくたになりながら家に着くも、毎日のジョギングは欠かさなかった。そして徐々に体力が付いてきて走るのにも苦を感じなくなった。

体育祭の準備も着々と進み、応援合戦も徐々にまとまって来ており、皆で優勝狙えるんじゃないやねえ？と自信が溢れてきた。

「セイギ！いよいよ明日だな」

学校の帰り道。魔王が嬉しそうに言った。翔太と陽一はさっき分かれたばかりだ。

「さっきからそればかりだな。あー緊張してきた」

「何も恐れる事は無い。今まで頑張ってきたのだから」

「そうだな。頑張るよ」

そして快晴のもと、体育祭当日を迎えた。

第十話 体育祭 その1

雲ひとつない晴天のもと、体育祭の日を迎えた。

気温も暑過ぎず寒すぎず丁度良くまさに体育祭日和だ。

応援席には既に沢山の椅子が置かれ、他の学年の生徒も座っている。生徒は競技に出ない時は応援席で出場している選手たちを応援するのだ。

クラスの奴に適当に挨拶して空いている三つの椅子の横に座り、視界の端で体育祭実行委員が慌ただしく準備しているのを見ていた。魔王は応援団の関係でない。翔太と陽一は陽一が寝坊した為、俺と魔王は翔太に陽一をまかせ先に来たのだ。

午前の部に綱引きを出て、午後の部の最初に応戦合戦。その後には騎馬戦で最後に色別リレー。

・・・緊張してきた。そうか。俺リレーに出るんだったよな。だ、大丈夫だろうか。

今から緊張していてどうするんだと思っていると背後から声を掛けられた。

「呉羽さん。おはようございます」

振り向くと一条さんが後ろの椅子に座っていた。準備万全らしく赤い鉢巻が頭に巻かれている。

「おはよう一条さん。晴れて良かったね」

「ええ本当に。一生懸命練習して来ましたから助かりました」

そんな他愛のない話をしていると、一条さんが真剣な表情で「あの」と話を切り出しづらそうに視線をさ迷わせた。

「実はお話したい事があるんです。でも、ここでは言えないので・・・」
「分かった。じゃあ、体育館裏でも行く？」

という事で、俺達は人気のない体育館裏へと向かった。

「実は最近悪魔の気配を感じるのです」

「あ、悪魔の気配・・・？ええと、一条さんは悪魔が近くにいて分かって事？」

「はい。調べてみた所、どうやらこの学校の生徒に取りついているらしいのです」

「え？マジで？」

「まだ誰とは分からないのですが・・・」

「それで俺達はどうすればいい？」

「え？」

「何か手伝った方がいい？」

「いいえ大丈夫です。ただ知らせておいた方がいいと思っただけなので」

「そっか・・・何かあったら俺達に。いや、ルシフェルに言ってね」
「え・・・？」

一条さんは啞然としていた。俺変な事言ったか？

「彼は魔王ですよ？魔王が同じ魔族を殺せると思えますか？」

生徒が運動場に色ごとに集まって整列し開会式が行われた。プログラム最初の開式の言葉で青色の代表が朝礼台に立つ。

俺はそれを一条さんが言った言葉を思い出しながら聞き流していた。魔王であるルシフェルが同じ魔族を殺せる筈が無い。

俺は隣にいる魔王に視線を送った。するとその視線に気づいた魔王がどうしたんだ？という表情をしながらこちらを向いた。何でもないと顔を左右に振ると魔王は再び前を向いた。

こいつは、俺や翔太達がもし悪魔に取りつかれそうになったら、助けてくれるのだろうか。もし一条さんが言った事が本当なら、こいつは俺達を……

俺はハツとなつて馬鹿馬鹿しい考えを振り払った。何を考えているんだ。悪魔に取りつかれる事なんて……それに俺が悪魔に取りつかれるだなんて、そんな馬鹿な事が起こる筈がない。

そんな事を考えているといつの間にか開式の言葉が終わっており、校長が朝礼台に立って話していた。

それから校長、教頭の言葉が終わわり、選手宣誓が行われた。各色の団長7名が朝礼台の前で集まり、旗を掲げる。そして選手代表で選ばれた赤組団長の戸田さんが声を上げる。

「宣誓！私達は皇天高校の生徒である事を誇りに思い、組で団結し、全力で競技に挑み、正々堂々と戦う事をここに誓います！選手代表、

戸田圭吾けいご」

力強い宣誓に皆のやる気が上がる。こうして体育祭が始まった。

プログラム最初の競技は玉転がし。自分の身長と同じくらいの大きさの玉を数人で転がして次のグループに渡し、早くゴールについたチームが勝ちという、小学校の時にやった記憶のある競技だが、ま

さか高校生になつてでもあるとは思わなかつた。一人では無く数人でやる為、チームワークが必要だ。ちなみに赤組は三位になった。それから障害物競走や二人三脚などで赤組は二、三位となる。

借り物競走では赤組女子の選手が応援席にやってきて魔王をかつさらつて行つた。体育祭実行委員が選手の引いたくじ引きの紙を読み上げる。

「赤組選手が引いたのは『好きな人』！という事でルシフェル君です。すね！いいでしょう！」

女子の選手は「キヤァー！恥ずかしい！皆の前で告白しちゃつた！」と言いながら何かの記念か魔王と握手をして嬉しそうにゴールした。それを見て他の女子が嫉妬の目をその少女に送る。

魔王は何が何だか分かつていないらしく後で説明しておいた。だが女子の選手のおかげか赤組は一位となつた。

そして綱引き。各色と戦い、勝ち残つた俺達赤組は白組と決勝をすることになった。白組は俺達赤組といい感じで競い合っている。実は団長の戸田先輩と白組団長の白木先輩（しんぎ）は犬猿の仲らしく、目を合わせれば睨み合っているのを何度も目撃している。

「白組には絶対負けないぞ！」

「赤組なんて負かしてやれ！」

再び睨み合う両者。先生がスターターピストルを構え、俺達は綱を掴み臨戦態勢をとる。

パンツとスターターピストルが発砲され、勢いよく縄を引っ張る。縄は中々引っ張れず、白組に引っ張られたら引っ張り返すという動

作を繰り返していた。

応援席や他の色から声援が聞こえ、中でも戸田先輩の掛け声がよく聞こえる。それに負けじと白組からも声上がる。

「皆頑張れ！赤組ファイトおおおお！」

「白組いくぞおおおお！」

「団長も張り切っておる！団長の思いに応えなくては！セイギ！余は勝つぞ！」

「は！？ちよつおまつ！」

団長達の熱意に感化された魔王が本気モードになったらしく、縄が後ろに強く引つ張られる。行き成り強く引つ張られた事で体制を崩した俺達は、悲鳴を上げながら後ろに倒れた。だがそれは白組も同じで前に引つ張れこけるように倒れる。

しかしそのおかげで勝敗は決した。俺達白組の勝利だ。

「ははは！見たか白木！綱引きは俺達の勝ちだ！」

「ふん！綱引きはな！だが次は俺達が勝つ！」

そして再び睨み合う両者。あれがライバルという関係か。

応援席に戻ったら陽一が「力出し過ぎ！」と魔王に怒鳴った。魔王はすまなそうに俯いている。一応悪かったと思っっているようだ。

綱引きの後はムカデ競走。入場門から各色の選手が運動場に出てくる。赤組の選手の中に一条さんが居る事に気付いた。一条さんはクラスの子と笑いながら定位置に着く。

ふと彼女が言った言葉が再び頭に浮かんだ。けどすぐに考えるのをやめようと頭を振る。考えたって仕方が無いのだから。

しかし何でこんなに気になるんだ？魔王が同じ魔族を殺すことが出来ないなんてあたり前じゃないか。

ムカデ競走が始まり選手達のチームプレイに応援席から歓声が上がる。途中で足が合わなくて足踏みを何度もする色や、転んでしまう色もあった。そんな中、やはり赤組と白組は競い合っていた。

「赤組の皆！頑張るのだ！」

「赤組頑張れ！！！！」

魔王が身を乗り出して応援している。戸田先輩も応援席の前を通過する選手に声を掛け応援していた。その後ろで副団長の早野先輩が応援席から出るなど戸田先輩に注意している。

そして赤組と白組のアンカーのチームが同時にスタートした。両者共息ピッタリで目が本気だ。他の色のアンカーのチームも赤組と白組に追い付こうと必死だ。

赤組と白組のチームは両者先を譲らずとうとうゴールまで数メートルという所まで来た。ここでラストスパート！と言わんばかりに白組が一気に加速する。赤組は出遅れたが同じく加速する。

そして

「ムカデ競走結果は、1位が白組！2位は赤組！3位は青組！4位は・・・」とアナウンスが流れる。

ゴールする瞬間を見て落胆する戸田先輩を白組の白木先輩が笑う。

「おのれ〜！」

「はははは！残念だったな戸田！ムカデは俺達の勝利だ！」

戸田先輩は悔しそうに拳を地面ドンドンと叩きつける。それを見た魔王は隣で分かる！分かるぞお！と同じく悔しそうだ。

ムカデの後は45分間の昼休み。いつも通り四人で集まって、母さんが作ってくれた弁当を広げる。すると三人組の女子が近づいてきた。その中に先程借り物競走で魔王を好きな人として連れて行った少女がいた。

「あ、あの、ルシフェル君。よかったら私達と一緒に昼食を食べない？」

三人の家の一人が遠慮がちに言うと魔王はうんと唸った。

「折角だが、余は」

「いいじゃん。一緒に食べて来いよ」

俺がそう言うと魔王は驚きの目でこちらを見た。

「たまには女子の相手をしてやれって言うてんだよ」

「だが・・・」

「そうそう。たまにはいいじゃないかな。女子にもサービスは必要だよ」

翔太にそう言われ魔王は黙った。何故か悲しそうな顔をして。しかしそれは一瞬の事ですぐに元の顔に戻り、三人と向き合った。

「すまない。やっぱり一緒に食べれない。余はセイギ達と一緒に食べたいから」

魔王がそう言うと三人は残念そうに去って行った。すると陽一が「あーあ」と溜め息を吐いた。

「これだからイケメンは。だけどいいのか？」

「何がだ？」

「彼女達可哀想だろーが。たまには一緒に食べ上げればいいのにさ。まあそれはそれでムカつくんだけどさ」

「いいではないか。誰と余が食べようと余の勝手だ」

「まあ、そうなんだけどさ……。ルシフェルは少し女子に冷たすぎじゃないか？ほら、いつもセイギと一緒にいるだろ？知ってたか？そのせいでセイギは女子に目の敵にされてるんだぜ？」

へえ〜目の敵にね……………は？

「何で俺が!？」

「え、知らなかったのか…………？」

「気付いてなかったんだ…………」

陽一と翔太が俺に追い打ちを掛ける。どうやら二人とも知っていたようだ。気付かなかった。俺嫌われていたんだ……。あれ？でも俺らのクラスの女子は普通に接してくれるけど。

そう陽一に伝えると陽一は溜め息を吐いた。

「ルシフェルと同じクラスだから普通に近寄れるし、いつだって話す事もできるだろ？それに比べて他のクラスとか学年じゃ接点なんてあまりないし。だから余計一緒にいるセイギが憎くなるという訳だ」

「そ、そうなのか」

「しかし、何故セイギが目の敵に？何故余では無くセイギなのだ？」

「好きな相手に嫌われる行動をとる人なんていないよ。それにルシフェル君に直接『セイギと一緒にいるな』って言える訳ない」

「うむ…………」

「いいんだ。いつもとばつちりが来るのは俺だから…………どうせ俺

なんて・・・」

「まあまあ、その代わりに俺達男子が温かい目で見守ってやるから」

「それって、可哀想な奴って思われているって事か？そんなの嬉しくない！」

「何が何だか分からぬが、すまぬなセイギ」

「分かってないなら謝るな！」

こうして昼休みは過ぎていった。

第十一話 体育祭 その2

昼休みが終わり、生徒がぞろぞろとグラウンドに戻って来た。点数番を見ると赤組は今2位。白組が1位で白組とは15点差だ。その後に青、黄色と続く。

午後の部の一番初めのプログラムがアナウンスされる。午後の部最初の競技は応援合戦。各色ごとにパフォーマンスをするのだ。

赤組は体育祭前の順番決めで最後にパフォーマンスをする事となった。

今は赤組の前の白組がパフォーマンスをしている。歌ったり、踊ったり。団長の白木は俺達赤組に負けないう張り切っているみたいだ。

魔王は応援団と共に着替えに行っている。応援団といったら学ラン、と言う事で女子が盛り上がっている。きっと魔王が学ランを着た所でも想像しているんだろう。

「おいセイギ〜」

入場門で待機していると翔太と陽一がニヤニヤしながらやって来た。

「何だよその嫌な笑みは・・・」

「さっき学ラン着たルシフェルを見たぜ」

「うん。すごい似合ってた」

「ああ、女子が盛り上がっているからな」

「いいよな学ラン。俺も学ラン着たかったぜ」

「仕方ないよ。うちの学校はブレザーなんだから」

だから余計に女子が盛り上がるのか。
すると後ろの方からざわめきが聞こえてきた。「カツコイイ！」と
か「すげー」とか黄色い叫び声が聞こえてくる。

「あ、ルシフェルだ」

陽一が人垣の向こうを探る為背伸びした。すると人垣が割れ、学ランを着た魔王が目の前に現れた。応援団で使われている学ランは上着の裾が長く、太ももの丁度真ん中位の長さだ。頭には赤い鉢巻が巻かれ、手には白い手袋をしている。

「どうだ？似合うか？」

魔王は何故か自信満々に訊いてきたので俺は素直に頷いておいた。

ああ。似合うよ。イケメンは何着ても似合うよコノヤロー！

すると団長が魔王を呼んだ。ルシフェルは返事をして応援団のもとに向かう。

周りを見ると、女子は皆夢心地で魔王を見ている。皆の目がハートに見えてきた。

白組が終わり、トリを飾る俺達赤組は入場し、それぞれ位置に着いた。旗を持った団員が大きく旗を振る。旗には白い生地で大文字で『赤』とかがかかっている。

団長の掛け声とともに応援団がよく目にする応援団の演武をし始める。

それから一生懸命練習してきたダンスを披露する。今流行りの曲に合わせてリズムよく踊りだす。そしてそのダンスに使用する小道具をポケットから出した。白い扇子に赤い文字で『赤』と描き、それを踊りながら翻させる。

応援団が旗を翻し、団長が声を上げる。その中で魔王が華麗に舞い、

それを他の組の女子がカメラで録画しているのが見えた。赤組の女子は私達も見たいのに！と悔しそうにダンスを踊る。

そして最後に団長の掛け声と共に応援合戦は終わった。退城門から出てきた俺達を待ち受けたのは女子たち。みんな魔王目がけて集まりだす。魔王は驚いた表情もせず女子たちに応える。

「うわー。相変わらずだな」

「うーん。ちよつと可哀想・・・かな？」

「あれが可哀想だと！？羨ましいって言うんだよ！」

陽一が悔しそうに地団駄を踏む。諦める陽一。アレに勝とうなんて無理だ。

すると女子から逃げてきた魔王が溜め息を吐いて汗を拭った。

「つ、疲れた・・・」

「おお、お疲れ」

「着替えてくる」

「うん。じゃあ僕らは応援席にいるから」

魔王は疲れた顔をして更衣室に向かった。少しその背中に不安を覚えたのは気のせいだろうか。

応援席に戻った俺達は魔王達応援団が戻ってくるのを待っていた。次の種目はパン食い競争。俺達4人は誰も出ないのでのんびりしていた。

「あ、団長達戻って来たよ」

翔太が校舎の方を指差すが、その中に魔王の姿は見えない。戻って

来た団長に訊いてみることにした。

「あの、団長。ルシフェルは？」

「ああ、ルシフェルなら女子に呼ばれてついていったぞ？」

そう言った団長は旗を持って応援の準備を شدした。

女子に呼ばれてついて行ったって……。

「また告白かな？」

「ルシフェル！俺にもその運を分けてくれ！」

「でも陽一は分けてもらっても有効に使えそうにないよね」

「どういう意味だ翔太？」

馬鹿だ。馬鹿がいる。

しかし、大丈夫だろうか。何度も告白をされている魔王だから心配はいらないと思うけど。何か胸に引っかかるんだよね……。

「あ、始まったよ。パン食い競争」

「そういえば次は騎馬戦じゃん！ルシフェルまだかよ」

「ったくしょうがない……俺ちよつと見てくるよ」

二人に見送られ、俺は校舎の方に向かった。遠くで爽快な音楽が鳴り、歓声も大きくなっていく。

グラウンドに一番近い更衣室に向かったのだが、魔王の姿はどこにもない。

告白と言ったら中庭とか？と考え中庭に向かってみた。誰もいない中庭はしんと静まり返り、人目に付かない場所を探した。すると……

「……だからすまない。余はそなたと付き合えない」

告白を受けている真っ最中であつた。

そつと近づいて建物の角から窺う。魔王はこの間の一条さんと同じような配置にいて、こちらに背を向けている状態だ。向かいには先程の借り物競走の時の女子がいる。

「何で？何で駄目なの？こんなに好きなのに・・・愛しているのに！」

ええと・・・いいのかなあコレ見ている。何か罪悪感を覚えるから去つた方がいいかな？でも次は騎馬戦だから出なきゃいけないし。

「余は誰も好きになつてはいけないのだ」

「どうして？どうして誰も好きになつちゃいけないの？もしかして親に言われたとか？」

そりゃあ魔王だから何て言えないし。

あいつも魔王何だから許嫁とか婚約者みたいなのいないのか？

「余は・・・すまない。言えない・・・」

「誰か好きな人でもいるの？いないなら、それなら私でも・・・私でもいいでしょ？これから私を好きになればいいじゃない？ね？」

「・・・」

「だって・・・貴方が誰かのモノになるなんて、嫌だもの！」

女子の質問に魔王は応えようとせず、視線をそらした。

何故か分からないけど、彼女の言葉が不快に感じた。二人の間に割つて入つて、女子に何か言いたくなつたが、何を言いたいのがよく分からない。

しかし、このままじゃ埒が明かない。しょうがない。手助けしてやるか。

「おーい！ルシフェル」

わざと遠くから声を掛けて、俺は今来たと装う。俺に気付いた魔王が驚いていた。

「セイギ？」

「うお！まさか、告白の真っ最中だったか。・・・あくすいません。こいつ次出場で、団長に探して来いと頼まれたものですから。連れて行っていいですかね？」

団長に頼まれたなんて嘘。こう言った方が俺は仕方なく来た訳で不可抗力だとアピール出来る。しかし女子は何も言わず俯いたままだ。

「じゃあ連れて行きますね〜失礼します〜」

魔王の腕を掴みその場を素早く立ち去った。その際後ろから何か聞こえたが気にせず走り続けた。

更衣室の前まで戻って来た俺達は息を整え、歩きながらグラウンドに向かう。

「すまないセイギ。助かった」

「モテる男はつらいな。それにしても彼女えらく粘っていたな」

「うむ。余もどうしようと考えたぞ。最悪の場合記憶操作の魔術を使おうかと考えた」

「やめんかい」

告白を沢山経験している魔王が苦戦しているのは初めて見た。告白自体はそんなに見た事はないが、見た限りでは今日が初めてだ。

「所でさ、お前婚約者とかいないわけ？」

「婚約者？うむ・・・そういうえばいた様な気もするが・・・」

「やっぱりいるのかよ！それを理由に断ればいいじゃねーのか？」

「いや、しかし。まだ決まった訳では」

「決まってなくても、断る理由にはなるだろ？相手がいるんじゃ告白しようとする女子も諦めるだろっし」

「そういうものなのか？」

「ああ。噂ってというのは、あっという間に広がるからな。特にお前関係は」

なるほどと魔王は納得したようだ。

それにしてもさっきから寒気がするんだが・・・何なんだろうか。

「呉羽・・・正義・・・」

アイツ ガ 邪魔者 カア？

中庭に取り残された少女が呟くと何処からか声が聞こえてきた。すると少女の肩に蝙蝠の様な黒い羽根を生やした生き物が現れた。

「ええ……いつもルシフェル君の隣を独り占めしている……邪魔者……」

ケケケ！ ソウカ ナラ 俺ガ 『カ』ヲ 貸シテヤロウ

才前ノ 願イヲ 叶エテ ヤルヨ

少女はニヤリと口を歪めた。

第十二話 体育祭 その3

障害物競争は青組の勝利に終わり、赤組は4位となった。ちなみに白組は3位。

次は騎馬戦なので入場門で待っていると入場の音楽が流れる。駆け足で門を駆け抜け、7色の選手たちが定位置についた。総当たり戦で各色と闘い、勝ち残った色が一位となる。

その中で赤組は順調に勝ち進み、準決勝まで進んだ。今回も戸田先輩は張りきって何隊もの騎馬を脱落させていた。

ちなみに俺達は4人で騎馬を組み、魔王が騎手となっている。つまり鉢巻を奪う役だ。魔王が騎馬とか言ったら、女子に何言われるかわからないからな。おお、怖い怖い。

「足が痛えっ！」

「陽一大丈夫？体育祭の前に石ころ拾ったのにまだ残っていたみたいだね。さつき怪我していた人がいたよ」

「あゝ、さつきのか。痛そうだったな。血がいっぱい出て」

「やめろよ思い出させるな！」

「でも裸足になるとやる気が出るというか、何と言うか力が入るよな」

「そうだな。何だか楽しいぞ」

『準備して下さい』

放送が流れ赤組は横一列に並ぶ。その向かい側に俺達赤組と1位を競い合っている白組がいる。本当にこれから戦をするみたいだ。どこからか法螺貝の音が聞こえてきそうだと思うていると、

ブオオオ〜

本当に鳴っていた。社会科の先生が鳴らしているようだ。そういえば、学校に法螺貝があるが使う機会がないとぼやいていたっけ。何処となく先生の顔が誇らしげだ。

「よーい！」

審判の先生がスターターピストルを構える。その合図で騎馬をつくり、その上に騎手が乗る。それぞれの隊がゆつくりと立ち上がり構えた。

パンツ とピストルの合図とともに声を上げながら走り出す。

「任せたぞルシフェル！」

「うむ！任せろ！」

放送委員の実況中継が響き、応援席から歓声が聞こえてくる。ちなみに騎馬戦は男子ばかりなので応援席には女子だけだ。

「とつたぞー！」

魔王が白い鉢巻を掲げながら声を上げる。

「全速前進だ！」

「「「おうよー！」「」

土埃が舞う中、俺達は次の騎馬隊に接近する。すると翔太が声を上げた。

「後ろから騎馬一隊接近！」

「右に方向転換して取ってやれ！」

後ろを振り向くと、白組の騎馬がこちらに突進してくる所だった。

「ルシフェル！彼女をとられたこの恨み、今晴らしてやる！覚悟しろっ！」

相手の騎手が叫びながら魔王に手を伸ばす。どうやらこの騎手は魔王に彼女を取られたらしい。八当たりというヤツだな。可哀想に。

「そうはいかない！余は勝つ！」

魔王はサツと身を翻し、相手の騎手に飛びかかった。猿のような身のこなしの魔王に周りの騎馬は次々と落馬したり、鉢巻を取られたりした。放送委員の実況中継がヒートアップする。

『すごいです！ルシフェル選手の身のこなしに白組は防戦一方です』

その実況に赤組から歓声上がる。主に黄色い悲鳴だが。

「させるかぁ！」

白組の白木先輩を騎手にした騎馬が俺達の騎馬に猛アタックを繰り出した。

「白木！お前の相手は俺達だぁ！！！」

すると、俺達の前に戸田先輩の騎馬が現れ、白木先輩の騎馬に突進

していった。白木先輩は戸田先輩の鉢巻を取ろうと構える。その時だった。

ピピッ

終了の笛が鳴り響いた。

『そこまです！各隊は元の場所に戻って下さい』

放送委員の掛け声とともに俺達は再び最初の位置に戻る。両者の団長の騎馬隊が鉢巻を集め始め、全て集めてから中央に躍り出る。

『では両者鉢巻を数えます。1本！』

1本の赤と白の鉢巻が中に舞う。そして2本、3本という掛け声とともに両者鉢巻を放り上げる。そして11本目に突入した時だった。

『11本！』

赤い鉢巻だけが中に舞った。地面に落ちるまでが長く感じ、落ちた瞬間に胸が熱くなった。

『騎馬戦の1位は赤組です！』

戸田先輩が騎馬から降りて叫び、そして俺達も歓声を上げる。歓喜のあまり抱き合ったり、飛び跳ねたりする奴等もいた。

「やったな！」

「うむ。ギリギリだったな」

「よっしゃー！って足痛え！」

「陽一、はしゃぎすぎ」

退場のBGMと共に颯爽と退場門を潜った俺達は応援席で靴を履いた。足は汚れたが幸いにも怪我はしていなかった。陽一は擦っただけらしく、血は出ていなかったようでホッとしていた。

「もうやってやったって感じたな。これで思い残す事はない」

「そうだな。あーあ、体育祭もこれで終わりだな」

「終わってないよ？セイギは最後に色別リレーがあるでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ」

そうだった！すっかり忘れていた！

やばい。思い出したら心臓がバクバク言い出した。

落ち着かせようと深呼吸を繰り返していると、俺の横で魔王が立ちあがった。

「余は応援があるので着替えてくるぞ」

「ああ」

「おー、お疲れ」

「行ってらっしゃい」

しかし、歩き出した魔王はピタッと止まり何故かこちらに戻って来た。

「どうした？何か忘れ物でもし」

「大丈夫だ。セイギなら走れる」

魔王は俺の両肩に手を置いてまっすぐ俺の目を見つめてきた。

魔王のその赤い瞳が俺の目を捉えて離さない。吸い込まれそうだと思った。

「毎日沢山走ったから、だから絶対結果が出せるぞ。セイギなら出来る。余はそう信じている。だから自信を持って」

そう言つて魔王は肩から手を離し、校舎へ向かった。

もしかしてアイツ・・・俺を励まそうとしてくれたのか？

すると俺達を見ていた陽一がニマニマしながら肩に腕を回してきた。

「おいおいセイギちゃんよ」

「何だよ気色悪いな」

「愛の告白をするのかと思つたぜ」

「一度死んでこい。そんでもつて二度と人間になるな。あと俺の前に現れるな」

「酷っ！何でそんなにセイギは俺に冷たいんだよ！俺の事嫌いなのか！？なあ翔太！？」

「うーん。俺も今の陽一には引くよ。ありえないよ」

「しょ、翔太まで！くそー！どうせ俺は嫌われ者だよ！」

「そういえば次何だっけ？」

「ええつと、次は」

「え？無視ですか？無視なんですか？」

隣で喚く陽一を放つておいて二人で話を進める。

次は二人三脚。そしてその3つ目、つまり最後のトリを飾るのが色別りレー。

赤組と白組は現在1位を争つていて、どちらも抜かせまいと必死だ。リレーまでに差が広がればいいんだけど、多分それはないだろう。となると、やっぱり最後のリレーが勝敗を決する事となるわけで、アンカーじゃないだけマシだけど、やっぱり途中の走者も重要だからな。

はあ・・・と俺は深く溜め息をついた。

爽快なBGMが鳴り、二人三脚の選手が入場してきた。いつの間にか学ランに着替えた魔王もいて、他の応援団員達と共に応援している。

出場しない翔太と陽一は俺の隣でのんびりと応援席で競技を眺めていた。

「トイレに行くってくる」と二人に告げた俺はグラウンドから一番近いトイレに向かう。グラウンドにもトイレはあるのだが、トイレがあるのは入場門の方退場門の近くに応援席がある赤組は校舎にあるトイレのほうが近かった。実際に赤組の人とすれ違っている。そしてトイレから出た俺を待っていたのは意外な人物だった。

「呉羽君？」

「え？」

そこにはルシフェルに告白していた女子がいた。彼女はニコリと笑い俺に近づいてきた。というかトイレの前で待ち伏せ!?

「あ、さっきの・・・」

「私は三年の岸川亜美。ちょっと話があるんだけど・・・いい？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6451o/>

魔王と正義

2011年10月7日22時34分発行